

国際化市民フォーラム in TOKYO



実施報告書

平成24年2月18日（土）10：00～16：00

JICA地球ひろば

主	催	東京都国際交流委員会	国際交流・協力 TOKYO 連絡会
共	催	日本国際連合協会東京都本部	
協	賛	JICA地球ひろば	
後	援	東京都	

目 次

I 事業概要	1
1 開催概要	1
2 開催プログラム	2
II 実施概要	4
第1分科会	
東日本大震災に必要な真の支援とは	
～2年目をむかえる復興支援のあり方を検証する～	4
第2分科会	
情報提供としての「わかる日本語」：パート1	
～日本語を母語としない人への情報発信等を考える～	16
《資料》	30
第3分科会	
東日本大震災から何を学ぶか	
～地域の取組と外国人支援のあり方～	36
第4分科会	
情報提供としての「わかる日本語」：パート2	
～「わかる日本語」の取組から見えてくるもの～	54
《資料》	66
III 国際化市民フォーラム in TOKYO アンケート結果	74

I 事業概要

1 開催概要

(1) 目的

外国人登録者数が約 41 万人で総人口の 3%を占める東京。国際化への理解と認識を深める機会とするため、震災と「わかる日本語」の 2 つのテーマを取り上げました。首都直下型地震が間近に迫る東京で災害に備え外国人支援のあり方について、また、外国人にとってわかりやすい日本語による情報提供を拡大していくには、どうしたらよいか考えました。

(2) 実施方法

分科会方式 (4 分科会)

(3) 内容

① 東日本大震災に必要な真の支援とは

～2 年目をむかえる復興支援のあり方を検証する～

② 情報提供としての「わかる日本語」：パート1

～日本語を母語としない人への情報発信等を考える～

③ 東日本大震災から何を学ぶか

～地域の取組と外国人支援のあり方～

④ 情報提供としての「わかる日本語」：パート2

～「わかる日本語」の取組から見えてくるもの～

(4) 日 時 平成 24 年 2 月 18 日 (土) 10:00～16:00

(5) 場 所 JICA 地球ひろば 渋谷区広尾 4-2-24

(6) 募集人員 各分科会 40～70 人

(7) 参加費 無 料

(8) 主 催 東京都国際交流委員会
国際交流・協力 TOKYO 連絡会

(9) 共 催 日本国際連合協会東京都本部

(10) 協 賛 JICA 地球ひろば

(11) 後 援 東京都

国際化

市民フォーラム in TOKYO



開催日時 平成 24 年 2 月 18 日(土)
10:00 ~ 16:00

開催場所 JICA 地球ひろば
(東京都渋谷区広尾 4-2-24)

受付 午前分科会 9:30 から
午後分科会 13:00 から

定員 各分科会 40 ~ 70 名

外国人登録者数が約41万人で総人口の3%を占める東京。グローバル化する東京が抱える問題点や課題、国際協力のあり方などを都民の皆さまとともに考え、国際化への理解と認識を深める機会とします。

午前 10:00 ~ 12:30

セミナールーム 301

1

東日本大震災に必要な真の支援とは ～2年目をむかえる復興支援のあり方を検証する～

3月11日の東日本大震災から間もなく1年。さまざまな支援が全国から寄せられ、また多くのボランティアが現地に駆け付け、被災地の復興に寄与したとされていますが、現在の状況はどうなっているのでしょうか。2004年の中越地震から継続的に長岡地域の復興に関わっている国際交流センター、風評被害の真ただ中でいわき市再生に向けて活動している地域の国際協力 NGO、岩手県遠野市を拠点にさまざまな団体の活動を裏方で支える中間支援型 NGO、地震直後から現地に駆け付けて緊急・復旧・復興と関わってきた東京の国際協力 NGOの4つの組織がそれぞれの振り返りを行い、2年目以降の真の効果的な支援とはどのようなものかを会場とともに考えます。

コーディネーター

山崎 唯司

JICA 地球ひろば市民参加協力アドバイザー

パネリスト

羽賀 友信

長岡市国際交流センター「地球広場」センター長

吉田恵美子

(特活) ザ・ピープル 理事長

齋藤 正宏

(特活) 遠野まごころネットワーク 理事 事務局長

野際紗綾子

(特活) 難民を助ける会 東北事務所長

2

情報提供としての「わかる日本語」：パート1 ～日本語を母語としない人への情報発信等を考える～

国際交流・協力 TOKYO 連絡会・情報伝達部会では、今年度、「わかる日本語」検討委員会を立ち上げ、全国の自治体と国際交流協会に対し、「情報提供における『やさしい日本語』について」の実態調査を実施しました。その結果によれば、「やさしい日本語」の必要性はあるが、実際に導入するには体制やスキルの問題などがあることがわかりました。

本分科会で、この実態調査の結果を皆様にお知らせするとともに、東日本大震災での情報提供に「やさしい日本語」の必要性がクローズアップされたことも踏まえて、外国人にとってわかりやすい日本語による情報提供を拡大してくにはどうしたらよいか、皆様とともに考えます。

コーディネーター

仁村 議子 IWC 国際市民の会 副理事長

パネリスト

庵 功雄 一橋大学国際教育センター・言語社会研究科 准教授
梶村 勝利 東京日本語ボランティアネットワーク 代表
小川 幹夫 大田多文化共生推進センター 所長

午後 13:30 ～ 16:00

セミナールーム 301

3

東日本大震災から何を学ぶか ～地域の取組と外国人支援のあり方～

東日本大震災発生から11ヶ月経ち、地震発生時から外国人支援をどのように行ってきたか、被災地から具体的に報告されつつあります。一方、首都圏では3.11大地震と集中豪雨による帰宅困難問題が発生しました。首都直下型地震や東海・東南海地震が間近に迫る東京で、「外国人が安心して暮らせる東京」を目指し、これからの災害に備え外国人支援のあり方について話し合います。

コーディネーター

江原 幸吉 共住懇

パネリスト

古家崎結一 東京都総務局総合防災部防災管理課計画調整担当係長
遠井 基樹 港区防災危機管理室防災課長
市川 裕之 小平市市民生活部地域文化課課長補佐
山川クリシュマ ネパール（足立区在住）
イーラン 中国（足立区在住）
ニティン・メハラ インド（武蔵野市在住）

セミナールーム 403

4

情報提供としての「わかる日本語」：パート2 ～「わかる日本語」の取組から見えてくるもの～

「わかる日本語」による情報提供は、様々な団体で取り組まれホームページなどで情報提供されていますが、ここでは、「わかる日本語」に取り組んでいる団体の皆様に、具体的な取組の状況を紹介していただきます。合わせて、取組に伴う苦労話や今後の参考になることなどもお聞きし、「わかる日本語」の着実な普及に役立てたいと思います。

コーディネーター

寺嶋誠一郎 中野区国際交流協会 事務局長

パネリスト

中山真理子 中野区国際交流協会 専門員、亜細亜大学講師
薄場 郁子 荒川区区民生活部文化交流推進課 都市交流係長
小野 朋江 多文化共生ネットワークたま代表

Ⅱ 実施概要

分科会 1

- テーマ 東日本大震災に必要な真の支援とは
～2年目をむかえる復興支援のあり方を検証する～
- ねらい 3月11日の東日本大震災から間もなく1年。2004年の中越地震から継続的に長岡地域の復興に関わっている国際交流センター、風評被害の真ただ中でいわき市再生に向けて活動している地元の国際協力NGO、岩手県遠野市を拠点にさまざまな団体の活動を裏方で支える中間支援型NGO、地震直後から現地に駆け付けて緊急・復旧・復興と関わってきた東京の国際協力NGOの4つの組織がそれぞれの振り返りを行い、2年目以降の真の効果的な支援とはどのようなものかを会場とともに考えます。
- コーディネーター 山崎 唯司（JICA 地球ひろば 市民参加協力アドバイザー）
- パネリスト 羽賀 友信（長岡市国際交流センター「地球広場」センター長）
吉田 恵美子（（特活）ザ・ピープル 理事長）
齋藤 正宏（（特活）遠野まごころネットワーク理事 事務局長）
野際 紗綾子（（特活）難民を助ける会 東北事務所長）
- 参加者数 47名

■分科会の構成■

- JICA 地球ひろば挨拶
- 各団体より支援活動報告
- 質疑応答
- まとめ ～我々はどのような形で関わっていくべきか～

● JICA 地球ひろば挨拶

あと1カ月で震災から1年が経つが、今回パネリストの方々からの報告を聞き、私たちは、これまでの支援のあり方をもう一度振り返り共有すると共に、今後の支援のあり方を今一度、見極め進んでいく必要がある。この分科会では、現場の状況を聞いて、10年～30年という長期的な支援に向けて、我々はどんな形で関わっていくべきかをみなさんと考えていきたい。



山崎 唯司 氏

● 各団体より支援活動報告

(1) 吉田 恵美子さん ((特活) ザ・ピープル 理事長)

(特活) ザ・ピープルは、福島県いわき市に本拠地を置き、元々古着の提供および販売益による事業費確保をしながらタイの山岳民族の支援等を行ってきた。本日は、3月16日から行っている震災支援活動についてお話する。

当団体は街づくりの団体として活動を行い、その一つとして、災害救援活動も掲げていた。



いわき市の被害状況は、震災当初殆ど報道されなかったが、原発の影響や地震・津波の被害があ



り、市内でも 300 名以上の死者を出した。現在もまだ罹災証明が届かない家が沢山ある。

当初はガソリン不足により物資支援が届かないという問題があったが、大阪の反原発の活動を行う団体よりマイクロバスの提供を受け、兵庫県内の事業所から提供されたロールカーペットを避難所に配布してまわったことを皮切りに、避難所を巡回しながらニーズを聞き、必要な物資を届ける御用聞きスタイルの救援物資配布を行なった。





地元の NPO として様々な支援活動を行っていたが、津波被災を受けた自宅の片付けの手伝いを申し出たとき、被災者からは反応が全くなかった。いわき市は保守的な部分もあり、NPO に依頼することに対する躊躇いがあったからだと考えられる。そこで、地域での問題解決にあたって地域特有の状況に応じるため、NPO 法人単独の支援ではなく社会福祉協議会と一緒に活動する形をとった。地域の支援を行う際、外部からのみの支援活動ではなく、地域との連携を大切にすることがより円滑

な支援に繋がると実感している。当時の社会福祉協議会の動きには様々な課題があったが、被災者にとって頼りやすい、お願いしやすい立場になることを一番に考えた。また、生活物資の提供等の活動の中で、これまでの古着リサイクル活動で培ってきた「顔の見える」ネットワークが活かされ、全国から支援をいただいた。被災者の雇用の問題では、津波被害で働く場を失った女性を支援する「母さんのお弁当」プロジェクトを開始した。そのお弁当は現在もボランティアさんを中心に利用していただいている。



現在、災害救援から復興支援のステージに移っている。いわき市内にある 3000 戸の仮設住宅は、殆どが双葉八町村からの避難者のためのものであり、津波で家を失ったいわき市民のためのものはたった 146 戸にすぎない。その他の人たちは一時提供住宅である民間のアパート、県営アパートを利用している。仮設住宅をつくらないというのが、いわき市の考えであったが、民間・県営アパ

ートでは元もとのコミュニティから離れ、バラバラに住むことになり、心のケアが大きな問題である。いわき市の被災者の方々や双葉八町村からの避難者の受入れ、そしてそれを取り巻く周辺住民の方々との間でどのような支援を進めていくのかが今後の課題である。いわき市は、バラバラに住み始めた人々へのケアの仕組みがまだまだ不十分であり、そこを補っていくのが当団体の役割でもあると考える。原発にもっとも近い場所であり、多くの方が原発作業に向かっている場所でもある。



首都圏から入ってきた大きなNGOでは、シャプラニール※のみ腰をすえた支援をしてくれた。地域のNPOはまだまだ脆弱な部分があり、本当の支援に踏み込めない現状がある。その中で、被災農地を活用し、首都圏からの人の呼び込みや分断されたコミュニティの人々が共に作業することを目的にした「いわきオーガニックコットンプロジェクト」を検討しており、今後のコミュニティ



ィの再生を図りたいと思っている。

※シャプラニール…1972年に設立された特定非営利活動法人。正式名称：特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会



3. 11の地震・津波の災害被害は過去のことかもしれないが、いわき市には、現在進行形の災害が起こっていることをお伝えしたい。

コーディネーター：地元のNPOでも地元の人の家へ支援になかなか入って行けなかったというのは衝撃的であった。外部からの支援の力があまりにも強すぎるという現状もあるということは、現場からの声でないと見えてこないことでもある。

質問①

住民の方々のリーダーシップ力をいかに支えていくか、外部者がどのように関わっていくかがお話のキーポイントであったと思うが、住民の中からどのようにしてリーダー的存在を見つけたらよいのか。

吉田：仮設住宅などでは集会所で催されるサロンなどの機会を捉えて会話をする中でだんだんわかってくるものだが、地域に点在している被災者に対する部分では、社会福祉協議会など公的なところとのつながりから個人レベルでのニーズが見えてくる。行政も社会福祉協議会もNPOもそれぞれの垣根を越えられない現状があるが、そこを取り外せばいい情報が共有でき、リーダーシップを持っている人たちの存在が浮き上がって見えてくるのではないかなと思う。

コーディネーター：この一年でその垣根に変化はあるか。

吉田：支援活動を行う団体も含めた協働会議が行なわれるようになってきた。今後はその協議の場に他地域の人たちにも加わってもらおうという話にもなっている。少しずつ垣根の高さは下がってきている。



吉田 恵美子 氏

質問②

いわきオーガニックコットンプロジェクトに興味を持った。一年経つと、ボランティアの数も少なくなっているかもしれないが、日帰りや一日でもやりたい人の受け入れは可能か。

吉田：種まきや草むしりなどの作業を通して、首都圏のみなさんにもいわきの農業の現状を見ていただき、地域の再生の仲間になっていただきたい。ぜひ一緒にできたらと思う。

(2) 齋藤 正宏さん（(特活) 遠野まごころネットワーク 理事 事務局長）

私は事務局長となっているが、基本的には個人のボランティアである。震災支援では、当初宮城には支援に人が来るが、岩手には人がこないという現状があった。現地の生き残った人は、どのように心を奮い立たせて立ちあがってきたのか。私はこの地に立った時に何をするのか、この地に来るボランティア等の人達はどんな人が来るのか知りたかった。4月5日に遠野に入り、6日から陸前高田市の瓦礫のなかを歩いた。地元の人たちに

覚えていただくために同じ服装で何度も何度も通った。その中でどういった物資が必要なのか、アレルギーなどで困っているケースがないか等聞き取っていった。遠野市は周辺の市から50キロほど離れているため、その日避難所等でわかったことを遠野市の事務所へ持ち帰り会議で共有した。

やがて仮設が建ち避難所からの引っ越しが始まると、被災者は個室で自分の境遇を見つめざるをえなくなった。そういった人たちへの寄り添いが

必要となったが、それぞれの境遇は、地域によっても被災状況によっても全く異なっていた。仮設に入るまでに、知り合いが誰もいなくなってしまったケースもある。大槌町の仮設では、津波の浸水区域であるため自分の住んでいた地域に帰ることを許されない方々が多い。物作りなどのワークを行うお茶っこ活動をしているが、日中どんなに私たちが寄りそっても、身寄りも、収入の目処もない人たちが、夜に思い詰めてしまっても何の不思議もない状況が続いている。



齋藤 正宏 氏

畑の地表面の瓦礫は概ね片付いてきたが、田畑の土中にも沢山の瓦礫が残されていた。田んぼ1枚をきれいにするのに50人で10日を要したが、村ひとつ分の土中瓦礫と取り組むことにした。春から秋まで5ヶ月間、延べ1万人のボランティアと地元の方々の協力が得られた。作業に参加しない人たちも、瓦礫が減ってゆくにつれ、声をかけてくれるようになった。津波で立ち枯れた杉を伐りだし丸太小屋を建てゆく作業を通して、親爺さん達は自分や仲間の力を再発見している。畑では、お母さん達が、在宅・仮設の区別なく集まっている。一緒に作業する中では、多少のもめことも起こるけれど、それもコミュニティの種。仮設も在宅もない、ひとつの村に帰っていく必要がある。

そして大切なことは、支援する側が、人々の心に格差や壁を作らないように配慮すること。私たちの仕事は、現地の方々が、新たなコミュニティを育む手伝いなのだから。

現在、地元のお父さんたちと製材所を作ろうとしている。外部のゼネコンが建物を作る仕方ではなく、できるだけ地元のひとたちにやってもらう支援を目指している。地元の人達で作る実績ができると行政も動く。私たちができることは、一点突破で雛形をつくって、行政を動かし、他の人たちが支援に入っていける仕掛けを広めていくことである。

今後の復興支援では、一気に大勢で現場へくるのではなく、少数でも少しずつ来て作業を手伝ってくれるような継続的な支援が必要である。行政だけではコミュニティは取り戻せないため、地元のお父さん、お母さんが元気になっていくことが大切であり、そして帰ってこようとしている20、30代の人々のために接木をしなければならない。今、津波の経験をした子どもたちのケアができていない現状がある。その子どもたちが数十年後に戻ってきたいと思うような「コミュニティ」が必要であり、今後も地元の人たちと話し合いを重ねこういった問題を解決していかなければならないと思う。

コーディネーター：齋藤さんの話は何度か聞いているが、「ボランティアというのは、自分からできるものを探すものだ」という言葉が心に残った。

（３）野際 紗綾子さん （（特活）難民を助ける会 東北事務所長）

難民を助ける会は主に途上国において、「緊急支援」「障害者支援」「地雷対策」「感染症対策」「啓発活動」の５本柱で活動を行なっている。東日本大震災被災者支援活動では、これまでの途上国支援を活かし、支援から取りこぼされる人をできる限り作らないために、「福島支援」と「障害者・高齢者支援」を行っている。本日は、「障害者・高齢者支援」についてお話す。

今回の津波被害による障害者の死亡率は、住民全体の率に比べて２倍であったというデータが出ておりとても残念に思う。特定の市町村に活動を限定するのではなく、福祉の分野として、県レベルの活動を日本障害フォーラム（JDF）と連携しながら活動を行っている。私は震災から２日後に現地入りしたが、被災地はインフラも壊滅的な被害であった。女川第二小学校の小さな体育館では、３月１９日時点で２,６００人が避難しており大混乱だった。首から段ボールのプレートをかけ、行方不明の家族を捜す人々もあった。宮城県内の障害者施設を訪問したが、インフラや食料等すべてのものがなく、家族とも連絡が取れない、職員も一部行方不明になっているなどあまりにも悲惨な状況があった。これまで海外の災害支援の現場もみてきたが、残念ながら今回の震災の破壊力はこれまでの災害支援の中で最も大きかった。海外での災害支援の経験から、災害が起きたときはまず全



野際 紗綾子 氏

体の状況を把握している県庁、災害対策本部などに行き情報収集し、全体状況を把握するようにした。しかし、今回宮城県の障害福祉課からは、「今私たちにできることは電話を掛けることのみです。しかし、その電話も繋がらない。難民を助ける会の物資支援配布の際に安否状況が分かれば教えてほしい。」という言葉をもらい、これほどまでに行政も被災しているのかと衝撃を受けた。

全国の企業からの協力もあり物資支援を行い、ガソリンなど、数キロにわたる列に並ぶことが困難であったご高齢の方々、障害のあるの方々へ配布した。行政や保護者からの要望もあり、災害救助法の対象外となる在宅避難を続ける重症心身障害児（者）のご家庭へ、ポータブル発電機も配布した。今回、被災障害者は仮設住宅のトイレが使用できないなどの理由で避難所に入ることができなかった。彼らにも昔からの仲間と会える「場」の提供が必要であったため、助成金を取りながら、福祉施設を中心に迅速な施設修繕支援を約５０の福祉施設で実施してきた。ただ、ニーズは刻々と変化しており、福祉施設においてもこれからの授産品の販路拡大や障害者の社会参加の促進が求められている。

活動課題としては「人、金、関心が足りない」「災害弱者についての認識不足」「過酷な環境の被災地における職員、支援者の安全と健康の確保」



が挙げられる。障害のある人に優しい社会はすべての人に優しい社会。難民を助ける会は、そんな復興を目指しながら、関連機関や団体と協力して行政を後押ししていきたい。最後に、私たちにできることを、会場の皆さんと一緒に考えたい。一つ目は「知る」―災害支援に関心を持ち、批判的な目で報告資料を読むこと。二つ目は「動く」―できることから挑戦してみることを提案したい。三つ目は、本スライドで敢えて空欄にさせて頂いた。会場の皆さん一人ひとりの得意分野を活かされるのが良いと思う。よく報告会などで『何から始めたらよいかわかりません』という質問を受けるが、被災地のことを想像力を働かせながら考えること、まずは関心を持ち続けることが支援者、被災者にとっていつか大きな力となることを確信している。

コメンテーター：NGOの強みである緊急時の迅速性に

ついて、今回はどうだったか。

野際：震災で震度7と出て東京の揺れも大きかったため、当会としてもすぐに支援を決定した。事務局には緊急支援出動パッケージが常備されており、いつでも支援活動へ出発できるような体制を整えている。

質問①

山元町の施設の支援に行った際に、「利用者が見つからなかった」と発表があったが、どのような状況だったのか。

野際：福祉施設の利用者が震災で行方不明になっていた。電話がほとんど繋がらず、ご家族との連絡も取れない状況だった。

(4) 羽賀 友信さん（長岡市国際交流センター「地球広場」センター長）

今回の震災では、先遣隊を東北へ送り、私自身も仙台の多言語支援センターへ入ったが、情報を与えるだけでは全く機能しないということを痛感し、16日に東日本大震災バックアップセンターを立ち上げた。新潟県では、中越地震の経験をもとに復興計画を市民の目線で作成しており、その一つに市民防災センターの設立がある。これは1



羽賀 友信 氏

階に子育て支援センターが入っており、災害時にはボランティア受け入れが可能となる。バックアップセンターというのは、社会福祉協議会が作るボランティアセンターが手の届かない部分を専門的にカバーする機能をもつ。市とも公設民営で行なう体制を一年かけて協議していたところ今回の災害が起きた。

災害支援活動のステージは三つある。「緊急→復興→地域おこし」にどう繋げるかという視点を考えなければならない。神戸からの教訓を活かし、仮設住宅に入った後地元の人達が自分たちでどんな街にしていくかを考える過程を大切にする必要がある。長岡市では、これまでの中越沖地震、中越地震の際に受けた支援をどのように恩返ししていけるかという気持ちが大きい。本来は現地へ入るボランティア支援だが、今回は受入支援に大きな割合をとった。主役はあくまでも地元の人であ

り、本当のニーズをくみ上げるには市民主導でなければならない。自分たちも過去に被災した経験から、被災者の立場にたってニーズをくみ上げ、各専門家の協力を受け支援を行なっている。また、今回津波の映像までは全国で共有できたが、その後の複雑な状況に関する報道は少なくなった。こういった状況に対して今後も継続して発信していかなければならない。メディアとのコラボレーションでは、「義捐金」「支援金」の違いを伝え、支援に入っている民間団体への支援金が流れやすくした。

現在、宮城県への復興支援員派遣を当初の 10 人から 100 名増加で決定し、課題を共有して被災地で何ができるのかを検討している。バックアップセンターの立ち上げの中で、なかなか現場へ入らないとわからない高齢者や在宅の人たちなどの「見えない被災者を作ってはいけない」という共通認識がある。また、バックアップセンターを

市民サポートセンターとして一年間寄り添って支援を続けている。このような長岡市の「行政と一緒に考え行政を変えていった」支援体制は、防災支援においても災害支援においてもより早い支援につなげる第一歩である。

今年は、長岡市も豪雪の影響が大きい。こういった雪国は日頃から防災・災害対策の危機管理が高いのかもしれない。また、雪がないところから避難されている方も多くいるので、そういった人々をどのように支援していくかが求められる。ぜひ関心のある方は長岡を訪れてほしい。一つ言えることは、中越地震では、復興支援過程で長老だけの地域は衰退し、若いコーディネーターを受入れた地域は復興を成功している事例があった。その点を教訓とし、今後の復興支援、地域おこしへ繋げていけたらと思う。

● 質疑応答

質問①

コミュニティ再生、場・地域づくりについてどのように取り組み、連携すべきか。

吉田：福島いわき市が一番難しい。被災者と向き合うときに相手を探らなければならない（津波で被害、原発で避難、それぞれ複雑な背景を持っている）。福島では、思うように自分のいたいことをいえない現状がコミュニティにある。保証金の問題など金銭的な問題が受入側にも出てくる。また、いわきの市民と避難してきた人たちが交流する機会が殆どないため、今後は互いの顔の見える関係を早い段階でつくる必要がある。

齋藤：仕事づくりができれば、住んでいる場所が変わってもかわらないコミュニティができる。最近被災地で見えてきたのは、果たしてこれは被災だけの問題なのかということ。復興資金がなくな

った後はどうなるのか。復興とは、地域の人たちが外部からだけの支援を受けるのではなく、地元の中でまわしていかなければならない。復興支援を通して若者が活発に活動しているなど災害地は日本を復興している。災害被害は「10 年分の過疎が進んだ」との声もあるが、「復興は戻していくのではなく、作っていくこと」、「10 年先を進んでいる」と被災地の人たちは考え、前に進もうとしている。

野際：1 つ目は、立場の違いを越え、つながって、目的を共有すること。海外の災害支援では、クラスター会議と呼ばれる分野別調整会議が開催され、関心がある人全てが参加権を持ち、目的や課題を

共有し、対応策を協議するようになっている。こういった仕組みが日本にも必要である。2つ目は、活動資金の流れの円滑化。今回の災害支援では、一部の国際協力 NGO へも多くの資金が流れ、海外の財団からの支援も多数寄せられた。しかし、申請書など、助成金のスキームの中で言葉の壁によって地元の団体へ資金が流れることを困難にした。資金提供元と地元の活動団体をつなぐ専門家のサポートが必要ではないか。3つ目として、モデルケースと成りうる活動をアピールしながら、成功事例をより多くの人々と共有し、広く応用しながら展開することが必要である。

羽賀：長岡市の視点から、自分たちは、今後どういふふうに生きていきたいかを共有し、ビジョンにしていくことが大切である。そのビジョンを実現するために手法を作っていく。外からの支援も大切であり、決して被災地のことを忘れずその教訓、経験を他の地域の防災へ活かしてもらうことも大きな力になる。若者が復興のプロセスで学ぶことは本当に多い。復旧というのは、行政指導で元に戻す。復興というのは、起こってしまったことは仕方がなく戻らないため、これをどのように活かすかが必要となってくる。

質問②

福島県の子どもたちが減少している。残った子どもたちの心境は今後の問題点は？

吉田：東京でも放射能への不安があると思う。「逃げた」という表現が横行している。それぞれの家庭の事情があり、悩んでいる方、開き直っている方、どちらの判断に対してもどうこう言えない現状がある。とにかくきちんとした数値を出して、

自分たちが判断できる仕組みを作っていくことがスタートだと思う。また、子どもたちに、親としてエネルギー転換の重要性を伝えるなど取り組みをしなければならない。

質問③

災害に備え、これからの高齢者支援で今からやっておくべきことは何か？

野際：首都圏直下型地震がいつ発生してもおかしくなく、明日は我が身という状況下で 次の災害への備えは喫緊の課題である。まずは、身の回りからできることから実施することが重要。例えば、避難所となる体育館で段差になって車椅子が通行できないすのこを排除し、仮設トイレの一部を高齢者・障害者用のものに変更するなど、今からすべての人にとって利用できる避難所となるよう改善していったらどうか。また、話し合いには、事

業の計画立案の段階から必ず当事者を入れていくことが必要である。

齋藤：コミュニティ構築では、在宅の方からも声を聞きながら平時から顔の見える関係、コミュニケーションをつくっていくことが大切である。その地域に住んでいる人、避難されている人には様々な背景、状況があり、お互いに意識を共有していくことが大切である。

質問④

まごころネットボランティアの精神面のケアは？

齋藤：ボランティアも二次被災している。リーダーが基本的に見ており、健康面は宿泊棟でみんなでケアしている。しかし、もともと使用していた場所からプレハブの施設へ転居し環境はかなり厳しい。ボランティア施設のケアも重要であると行政に認識してほしい。



● まとめ ～我々はどのような形で関わっていくべきか～

羽賀：長岡では、復興基金の自由度がとても大きく、その活動がだんだん活動団体の輪になり世論作りに繋がった。それを見て行政が「行政主導だと平等性が出てスピードが遅い」と判断し、市長からも市民協働型が必要だと提案があった。また議会も理解してくれた。備えとしては、学びを積み上げていくことが大切である。自分のところに置き換え、まず自助を考える、まさにクラスター会議を開くべきである。事前協議がどれだけ力を持つかも重要である。共助のあり方として、それぞれの専門性をどのように生かすかが重要である。ボランティアは「わたしにできること」から「私

にしかできないこと」へどのように変わっていくかが大切である。公助のあり方として、世論を反映するため活動している団体が仕掛けをつくって、民主導の体制を後押ししつくなっていくべきである。

コーディネーター：短い時間の中で、各講師から貴重なお話を伺った。今後は、本日のお話を受け、東京と被災地とのギャップをどのように埋め、何が事実なのか探り、被災地への関心を持ち続け、今後長期的に自分たちにできることを行なっていくことが求められる。

- テーマ 情報提供としての「わかる日本語」パート1
～日本語を母語としない人への情報発信等を考える～
- ねらい 国際交流・協力 TOKYO 連絡会・情報伝達部会では、今年度、「わかる日本語」検討委員会を立ち上げ、全国の自治体と国際交流協会に対し、「情報提供における『やさしい日本語』について」の実態調査を実施しました。その結果によれば、「やさしい日本語」の必要性はあるが、実際に導入するには体制やスキルの問題などがあることがわかりました。本分科会で、この実態調査の結果を皆様にお知らせするとともに、東日本大震災での情報提供に「やさしい日本語」の必要性がクローズアップされたことも踏まえて、外国人にとってわかりやすい日本語による情報提供を拡大してくにはどうしたらよいか、皆様とともに考えます。
- コーディネーター 仁村 議子（IWC 国際市民の会 副理事長）
- パネリスト 梶村 勝利（東京日本語ボランティアネットワーク 代表）
小川 幹夫（大田多文化共生推進センター 所長）
小澄 龍太郎（杉並区交流協会 事務局長）
- 参加者数 45 名

■分科会の構成■

- 日本語を母語としない人への情報発信等に関する実態調査の報告
- やさしい日本語による行政情報提供の課題
- パネルディスカッション

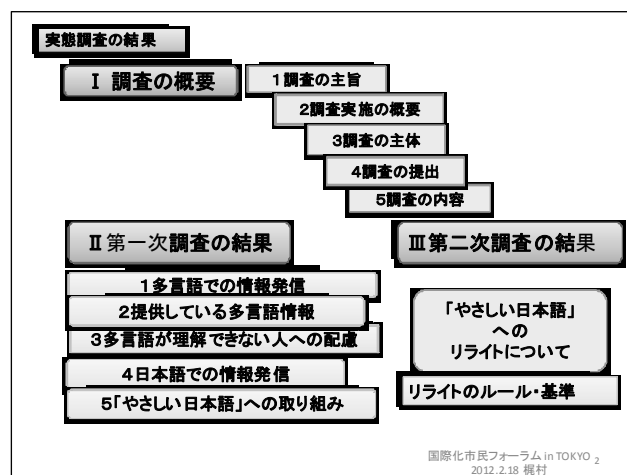
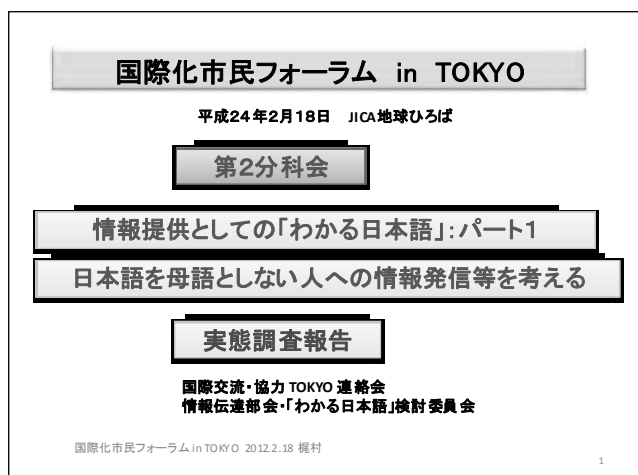
● 日本語を母語としない人への情報発信等に関する実態調査の報告

梶村 勝利さん（東京日本語ボランティアネットワーク代表）

東京では、一般の公共施設や各自治体のホームページなどは、多言語（特に、英語・中国語・韓国語）での表記が普及している。しかし、その他少数言語への対応には限界があり、また、公の文書の中でも、学校のお知らせなどはなかなか外国の方には伝わらない面がある。そこで、これらの問題に対し、「やさしい日本語」の必要性が議論されている現状を踏まえて、調査を行った。（調査主体：東京都国際交流委員会／国際交流・協力 TOKYO 連絡会『日本語を母語としない人への情報発信等に関する実態調査』）



梶村 勝利 氏



I. 調査の概要

I-1. 調査の主旨

- ・緊急災害時の情報発信・提供に、多言語の他「やさしい日本語」が増加。
- ・日本語を母語としない人の生活に関わる行政情報等の提供体制の整備が課題。
- ・東京都の外国人登録人口は総人口の3%、新宿区では10%を占める。

I-2. 調査実施の概要／3. 調査の主体／4. 調査の提出

<第一次調査>

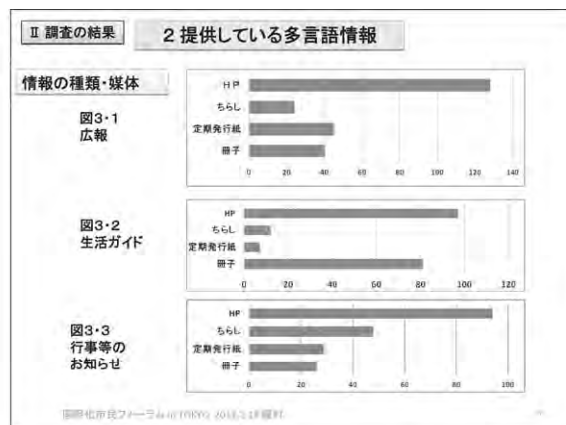
- ・調査件名 : 日本語を母語としない人への情報発信等に関する実態調査（第1次）
- ・調査項目 : 調査報告書の実態調査表のとおり
- ・調査先 : 都道府県、政令指定都市、地域国際化協会、東京都区市、都内国際交流協会
- ・調査方法 : 郵送式
- ・調査期間 : 平成23年7月27日（発送） 8月31日（提出期限）
- ・調査の主体 : 東京都国際交流委員会、国際交流・協力 TOKYO 連絡会
- ・調査の提出 : 197の団体（重複があり実数193）に調査を行い、163の団体から回答があった（回収率84.5%）⇒「やさしい日本語」への関心が高い。

<第二次調査>

- ・調査件名 : 日本語を母語としない人への情報発信等に関する実態調査（第2次）
- ・調査項目 : 調査報告書の実態調査表（2次）のとおり
- ・調査先 : 1次調査で「やさしい日本語」に取り組んでいると回答があった団体
- ・調査方法 : メール送信
- ・調査期間 : 平成23年9月27日（発信） 10月14日（提出期限）
- ・調査の主体 : 東京都国際交流委員会、国際交流・協力 TOKYO 連絡会
- ・調査の提出 : 二次調査は、既に一次調査で内容を示してもらっていたため、回収率が低かった（46団体中13団体 28.3%）。

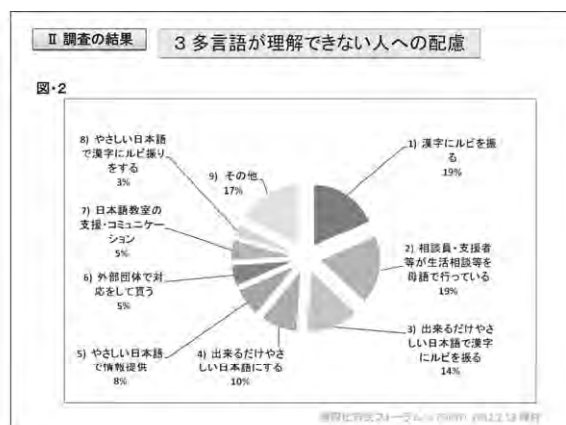
Ⅱ－２．提供している多言語情報

- ・広報や生活ガイドなど、どの種類においてもホームページでの発信が多い。
- ・生活ガイドの内容は、媒体によって内容の広がり具合が異なる。冊子の場合は広がり大きく、ホームページの場合はさほど広がらないことが多い。



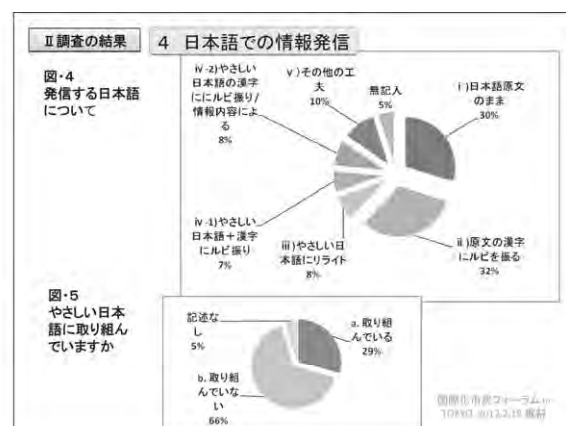
Ⅱ－３．多言語が理解できない人への配慮

- ・「漢字にルビを振る」と「相談員・支援者等が生活相談などを母語で行っている」が19%。
- ・「やさしい日本語」での対応は8%にとどまっている。



Ⅱ－４．日本語での情報発信

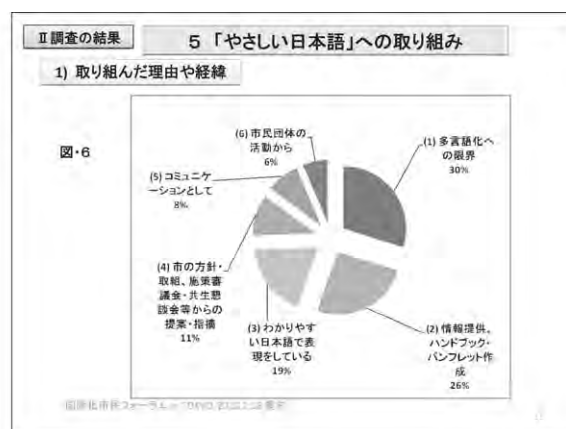
- ・「やさしい日本語」に取り組んでいないところが多い（66%）。
- ・「日本語原文のまま」（30%）、「原文の漢字にルビを振る」（32%）など、日本語は原文のままであるところが多数である。



Ⅱ-5.「やさしい日本語」への取組

1) 取り組んだ理由や経緯

- (1) 多言語化への限界（30%）…例：人材・経費の面
- (2) 情報提供、ハンドブック・パンフレット作成（26%）…例：災害時対応など
- (3) わかりやすい日本語で表現をしている（19%）
- (4) 市の方針・取組、施策審議会・共生懇談会等からの提案・指摘（11%）
- (5) コミュニケーションとして（9%）…各窓口にて必要に応じて
- (6) 市民団体の活動から（6%）…例：協働するボランティア団体が取り入れている



調査結果記述

やさしい日本語に取り組んだ理由・経緯(1)

- (1) 多言語化への限界
多言語化への限界を挙げている団体が 14 団体
・多言語化された情報が理解出来ない人への対応が必要だが母語での対応に限界がある
・多言語化は時間がかかり、情報を受け取るまでに時差が発生する
・人材・経費の面でも多言語化に限界がある
- (2) 情報提供、ハンドブック・パンフレット作成
・災害時対応
・生活ガイドを分かりやすくする
- (3) わかりやすい日本語で表現をしている
・できるだけわかりやすい日本語表現での情報発信や生活ガイドブックの作成などが取り組まれている

国際化市民フォーラム in TOKYO 2012.3.18 資料

調査結果記述

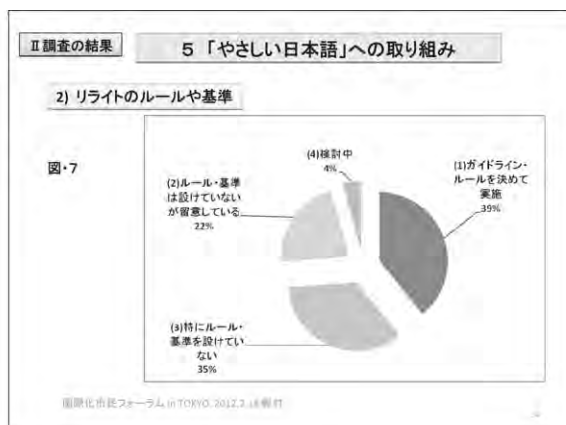
やさしい日本語に取り組んだ理由・経緯(2)

- (4) 市の方針・取り組み施策審議会、共生懇談会等からの提案・指摘
取り組んでいるところが 5 団体ある
- (5) コミュニケーションとして
・翻訳することはできなくとも、「やさしい日本語」を使用すれば自分で外国の人に情報を発信することが出来る
・日本人がやさしい日本語を学ぶことでコミュニケーションがとりやすくなり、異文化理解が深まることが期待できる
- (6) 市民団体の活動から
・協働するボランティア団体が取り入れている

国際化市民フォーラム in TOKYO 2012.3.18 資料

2) リライトのルールや基準

- (1) ガイドライン・ルールを決めて実施（39%）…例：日本語能力試験 N3～4 程度
⇒ どのくらいの人を対象とするかが大きな問題
- (2) 特にルール・基準を設けていない（35%）
- (3) ルール・基準は設けていないが、わかりやすくなるよう留意している（22%）
- (4) 検討中（4%）



調査結果記述

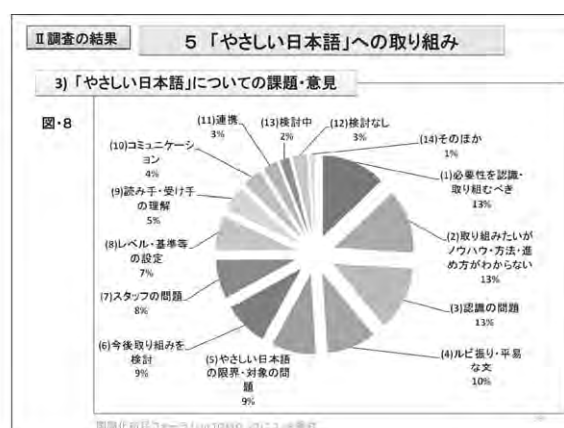
「やさしい日本語」でリライトする時のルール・基準

- (1) ガイドライン・ルールを決めて実施
ガイドライン・ルールを決めて実施している団体が 18 団体あり日本語能力試験のランクづけで、N3～N4（3級）級程度を基準としている団体が多い
・小学校3年生が理解出来る日本語表記としている団体もある。
・情報難民が出ないように来日3ヶ月の人がわかる。限りなくN5に近いレベルを挙げている団体もある
- (2) 特にルール・基準を設けていない
特にルール・基準を設けていない団体も多く 35%（16 団体）である
- (3) ルール・基準は設けていないが留意している
・翻訳者の経験から個々に配慮する
・簡単な構造の文章や言葉を使うなど、
・分かりやすい日本語で伝えようとしている団体もある

国際化市民フォーラム in TOKYO 2012.3.18 資料

3) 課題・意見

- (1) 必要性を認識・取り組むべき (13%)
- (2) 取り組みたいが、ノウハウ・方法・進め方がわからない (15%)
- (3) 認識の問題 (13%) …例：周りの理解が得られない 必要性が認識されていない
- (4) ルビ振り・平易な文 (10%)
- (5) やさしい日本語の限界・対象の問題 (9%) …例：情報伝達の正確性の問題
- (6) 今後取組み検討 (9%)
- (7) スタッフの問題 (8%) …専門知識を持つ者がいない
- (8) レベル・基準等の設定 (7%)
- (9) 読み手・受け手の理解 (5%) …どのレベルに人にどの程度理解されているか
- (10) コミュニケーション (4%) …例：日本人が「やさしい日本語」を学ぶことで、コミュニケーションの幅を広げ、外国人住民をより理解できるようにしたい
- (11) 連携 (3%)
- (12) 検討なし (3%)
- (13) 検討中 (2%)



調査結果記述
「やさしい日本語」についての課題やご意見(1)
(1) 必要性を認識・取り組むべき ・多言語化の限界から「やさしい日本語」への取り組みは必要 ・「やさしい日本語」による情報提供は今後取り組むべき課題で、検討が必要。
(2) 取り組みたいがノウハウ・方法・進め方がわからない ・すでに実践しているが、リライトに時間がかかり、多くの職員がノウハウを持たず負担が大きい、手探りの状態である ・これから始めるにあたりどうしたら良いのか分からない
(3) 認識の問題 ・やさしい日本語に対する周りの理解が得られない、得られにくい、必要性が認識されていない ・一方、徐々に浸透しているという団体もある ・相談窓口等で「やさしい日本語」を意識して接することが必要

国際化市民フォーラム in TOKYO 2012.2.18 資料

調査結果記述
「やさしい日本語」についての課題やご意見(2)
(4) ルビ振り・平易な文 ・漢字にルビを振ったり、やさしい表現を心がけ情報提供する ・「やさしい日本語」は本当に分かりやすいのか検討中 ・道案内など公的な情報の全てをやさしくした方がよい
(5) やさしい日本語の限界・対象の問題 ・「やさしい日本語」にすると文字数が多くなる、情報伝達の正確性の問題、原文を置き換える難しさなど ・「やさしい日本語」にリライトする際の問題点 ・正確かつ適格に伝えるためには外国語対応の方がよい
(6) 今後取組を検討 ・今後「やさしい日本語」での情報提供を検討していく(9団体) ・災害時等、その必要性は認識しており、今後の取組の検討事項となっている

国際化市民フォーラム in TOKYO 2012.2.18 資料

調査結果記述
「やさしい日本語」についての課題やご意見(3)
(7) スタッフの問題 ・専門知識を持つ者がいないなど、人材の確保が問題(8団体)
(8) レベル・基準等の設定 ・「やさしい日本語」のレベルの設定が難しい ・ガイドラインや語彙の言い換え用の辞書等の整備が必要 ・レベル・基準等の設定が難しい
(9) 読み手・受け手の理解 ・読み手・受け手の理解に関する検証が必要

国際化市民フォーラム in TOKYO 2012.2.18 資料

調査結果記述
「やさしい日本語」についての課題やご意見(4)
(10) コミュニケーション ・日本人がやさしい日本語を学ぶことで、外国人とのコミュニケーションの幅が広がり、外国人住民が感じている、言葉の壁、心の壁が低くなることを期待したい。 ・それには意識の問題もあるので普及には時間がかかる
(11) 連携 ・日本語教室や地域住民向けの交流事業は実施していないため、未だ多言語での対応となっている。 ・「やさしい日本語」に取り組んでいる国際交流団体もあり、日頃からネットワークを持っているので必要に応じて連携したい

国際化市民フォーラム in TOKYO 2012.2.18 資料

Ⅲ. 第二次調査の結果

Ⅲ 第二次調査の結果	
1 「やさしい日本語」で発信・提供している内容について 具体的な内容	
2 「やさしい日本語」へのリライトについて	
① リライトする時の体制	
② リライトする時のルール・基準	
1) 基本的な考え方・対象	
2) やさしい日本語文の作り方	
3) やさしい文に書き換えるときの留意点	
③ 「やさしい日本語」でリライトするとき困難と思われること	
3 「やさしい日本語」で発信・提供する対象について 発信・提供する対象についての考えと理由	
4 「やさしい日本語」で発信・提供した具体例	

国際化市民フォーラム in TOKYO 2016 仁村 議子



仁村 議子 氏

Ⅲ-1. 「やさしい日本語」で発信・提供している内容について具体的な内容

→報告書 P.41 参照

Ⅲ-2. 「やさしい日本語」へのリライトについて

① リライトする時の体制

担当窓口の職員が担当しており、他団体への委託などの特別な体制はできていない。

② リライトする時のルール・基準

1) 基本的な考え方・対象

- ・対 象…例：日本語を母語としないことにより、日本語の理解が困難な人
⇒何のために情報提供するのか明確にし、対象者を絞る
- ・考え方…例：情報の骨子を正しく伝えることを第一とし、中心となるより多くの人に共通する部分をまず伝え、細部の情報・個別の情報を同じ重さでは扱わない。

調査結果記述	②リライトのルール・基準(1)
1) 基本的な考え方・対象	
	・外国人が理解しやすいよう、平易でわかりやすい表現の日本語
	・日本語を母語としないことにより、日本語の理解が困難な人
	・対象者により、必要とする情報は違う。 何のために情報提供するのか明確にし、対象者を絞る
	・在住外国人にも幅広く、情報紙を読んでもらうことを目的 対象は来たばかりの、外国人の方々を読者とし、 日本語でも読んでみよう！と思える、おもしろい記事、 役に立つ記事を、やさしい日本語での記事の作成を目指す・
	・情報の骨子を正しく伝えることを第一とし、 中心となるより多くの人に共通する部分をまず伝え、 細部の情報・個別の情報を同じ重さでは扱わない、 省略し、問合せ先を示す
	・わかりやすくしようとして、説明するとよけい分かり難く なることがあるので、簡潔な文の積み重ねにする

国際化市民フォーラム in TOKYO 2016 仁村 議子

2) やさしい日本語文の作り方

- (1) 文の構造…例：文を短く、分ち書き、できるだけ短文にする
- (2) 語彙や漢字・ルビ振り…例：漢字は最小限にし、使用する場合はルビを振る
- (3) 動詞…例：動詞の名詞化や熟語はなるべく避け、簡単な動詞を使う
- (4) 連体修飾…例：詳細な形容詞や修飾語は減らす
- (5) 擬態語・擬音語…なるべく使わない
- (6) 反語・指示語・代名詞…例：反語を減らす
- (7) ひらがな…非漢字圏出身者向けに、ひらがなだけを使う
- (8) カタカナ・ローマ字…例：外来語は原語と意味や発音が異なるものが多いので、使用する際は注意する

調査結果記述 ②リライトのルール・基準(2)

2) やさしい日本語文の作り方(1)

(1) 文の構造

- ・文を短く、分ち書き、できるだけ短文にする。
(て形の接続、～とき、～すると など初級レベルの複文にすることもある)
- ・主語、目的語、述語をできるだけハッキリさせる
- ・文を文節で区切り、表記するときに、その区切りで余白をあげる
- ・必ずしも元の文章を直訳しない。
趣旨が伝わるように表現を改める。
不必要と判断される部分はカットし、根幹となる情報を伝える
- ・キーワードになる分かりやすい言葉は、なるべく文のはじめに持ってきて、その後説明を加える
- ・紙面に制約のため、「見てわかりやすい」を追及
文節の途中で行をまたがない。余白ができて次の行から始める
見出し、あるいは最初の文で、全体のテーマや要旨が伝わるようにする
よりわかりやすくなる場合は、箇条書きにする
イラストを活用し、理解の助けにする

調査結果記述 ②リライトのルール・基準(3)

2) やさしい日本語文の作り方(2)

(2) 語彙や漢字・ルビ振り

- ・来日3ヶ月の人がわかる限りなくN5に近い情報難民が出ないように
- ・日本語レベルは日本語能力N3,N4程度
- ・日本語能力試験3級から4級レベルを基準
日本語能力試験3級以上の語彙を使う場合には、注釈をつける
・小学2,3年生が理解できる日本語を使用するようにしている
- ・やさしい日本語での表現は、日本語話者にとって不自然に感じることがあるが、その方が外国人にとってはわかりやすい場合がある
- ・漢字は最小限にし、使用する場合はルビを振る。
ルビを読むのは可成り大変、時間もかかる。
発音がわかっていても意味がわからない人も大勢いる。
- ・ルビ振りのバリエーション
a. 上付き：漢字が苦手な人に向いている
b. 下付き：日本語初級レベルの人には勧められない。
c. かつ書き(後ろに付ける)

調査結果記述 ②リライトのルール・基準(4)

2) やさしい日本語文の作り方(2)

(3) 動詞

- ・動詞はなるべくひらがなを使う
- ・動詞等の活用が発生する文を書かない。
辞書形・～ないた・なかった等の基本的な動詞変化の範囲に収める
- ・動詞の名詞化や熟語はなるべく避け、簡単な動詞を使う
(例)揺れがある→揺れる 登校→学校へ行く

(4) 連体修飾

- ・詳細な形容詞や修飾語は減らす。
例)「地震の揺れで壁に亀裂が入ったりしている建物に近づかないでください」→「地震で壊れた建物に気をつけてください」

(5) 擬態語・擬音語

調査結果記述 ②リライトのルール・基準(5)

2) やさしい日本語文の作り方(3)

(6) 反語・指示語・代名詞

- ・反語を減らす：間違った使い方をしない → 正しく使う
- ・指示語、代名詞は極力使わない

(7) ひらがな

- ・ひらがなだけを使う(非漢字圏出身者向け)
漢字を使い慣れていない人にとっては
ひらがなだけのほうがわかりやすい

(8) カタカナ・ローマ字

- ・外来語、カタカナは避ける。使用する場合は英語を併記する
- ・外来語は原語と意味や発音の異なるものが多い、
使用するときは注意する
例：デマ …ドイツ語の単語を省略、日本人以外には伝わりにくいことば
・固有名詞の一部としてローマ字やアルファベットが使われている
場合、そのまま用いてふりがなをふる。

3) やさしい文に書き換えるときの留意点

- (1) よく使われる語彙…例：知っておいた方がよい言葉はそのまま使う
- (2) 二重否定…なるべく使わない
- (3) 文末、指示、可能…例：文末表現はなるべく統一する
- (4) あいまい表現…なるべく使わない
- (5) 尊敬語、謙譲語…なるべく使わない
- (6) 時間、年号…表記をわかりやすくする

調査結果記述	②リライトのルール・基準(6)
3) やさしい文に書き換えるときの留意点(1)	(1) よく使われる語彙 - よく使われる言葉、知っておいた方がよい言葉はそのまま使う 行政用語・専門用語等。区役所、税金。 難しい語彙は説明ややさしい語彙や簡単な表現に言い換える - 日常生活、または災害時によく使われる言葉、知っておいた方がよいと思われることは文章中ではそのまま使い、注釈をつけます。 例:「津波」→「津波くとても高い波」(漢字にルビ) - 同音異義語、綴外の漢字でも漢字を使用した方がわかりやすい場合があるので、漢字で表記する。 例:「手をふいてください」→「手を拭いてください」 「拭く」を「吹く」と誤解する可能性があるため (2) 二重否定 - 二重否定の表現は避ける 例:行けないことはない → 行くことができます。行けます。

調査結果記述	②リライトのルール・基準(7)
3) やさしい文に書き換えるときの留意点(2)	(3) 文末、指示、可能 - 文末表現はなるべく統一する ・文末は「です」「ます」形を使う - 文末を単純にする 消火に手間取っています。→ なかなか火を消せません。 十分注意してほしいと呼び掛けています。→ 注意してください。 - 指示表現の文末は「～しましょう」ではなく、「～してください」 「～しましょう」には指示以外にも勧誘の意味もあるので、 「～してください」のほうがわかりやすいため - 可能表現は「れる」「られる」でなく、「～することができる」 日本語能力試験3・4級で一番はじめに「～ができる」を習得する また、不可能の表現は、「～することができません」とする 例:電話は使えません → 電話を使うことができません - 文末以外でも、可能・不可能を表現するときは、 「～できる」「～できない」を使用する 例:燃えるゴミ → 燃やすことができるゴミ 燃えないゴミ→燃やさないゴミ

調査結果記述	②リライトのルール・基準(8)
3) やさしい文に書き換えるときの留意点(3)	(4) あいまいな表現 - あいまいな表現は、できるだけ避ける 利用することができるのではないだろうか → 利用できます 「等、など」は使わず具体的に。 ただし、並べる言葉がたくさんあり列挙しきれないとき 「～など」は使用可 (5) 尊敬語、謙譲語 - 尊敬語、丁寧語、謙譲語は使わない 御出席くださいますようお願い申し上げます。→ 出席してください (6) 時間・年号 - 時間や年月日の表記は分かりやすくする。 (「～」は使わないで「～」ハイフンか「から」にする) 8:30～17:15 → 8:30-17:15 8:30から始まります。 - 年月日の表記にはスラッシュ「/」を使わない。「2008/10/11」→ 「2008年10月11日」



Ⅲ－3. 「やさしい日本語」で発信・提供する対象について → 報告書 P.46 参照

Ⅲ－4. 「やさしい日本語」で発信・提供した具体例 → 報告書 P.46 参照

● やさしい日本語による行政情報提供の課題

小川 幹夫さん（大田多文化共生推進センター所長）

大田区には、外国人区民が約 18,000 人在住している。そのうち、7,000 人は中国、4,000 人は韓国の方であり、フィリピン、ネパール、アメリカと続いている。

ホームページでは、英語・中国語・韓国語に対応しているが、自動翻訳のため、精度が低いという問題がある。また、その他の取組としては、多文化共生推進センターより月に一度『Ota City Navigation』という外国人区民に向けた情報誌を発行している（日・英・中・韓・タガログ語に対応）。区民人口比としては、英・中・韓の3カ国語での情報提供により外国人区民の75%程度カバーできていると考えられるが、他の25%の住民に対する対応については検討中であり、そのことから「わかる日本語」検討委員会に参加することになった。

以下では、「やさしい日本語」に関する前述の調査結果を踏まえ、行政側の立場から、実際に取り組むにあたってどのような問題点があるかを中心に述べる。



小川 幹夫 氏

I. 日本語習得が十分でない外国人に対する情報提供手段

- ① 多言語による情報提供 ⇒ 対応言語の面で限界がある
- ② やさしい日本語による情報提供
 - ⇒ ある程度の日本語習得が条件になるが、母語や国籍に関わらず利用することができ、汎用性が高い
 - ⇒ 外国人住民に対する窓口サービスの向上にもつながる

II. やさしい日本語による情報提供の有効性

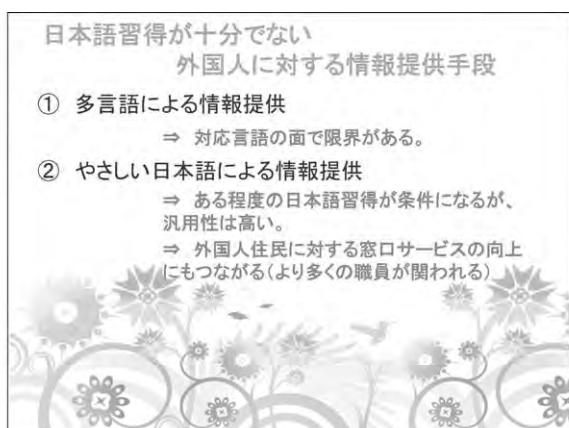
～大田区多文化共生実態調査（平成21年9月）の結果より～

（対象：無差別抽出した20歳以上の外国籍区民2000人）

○日本語に関する困りごとがあると答えた人（55%）のうち、

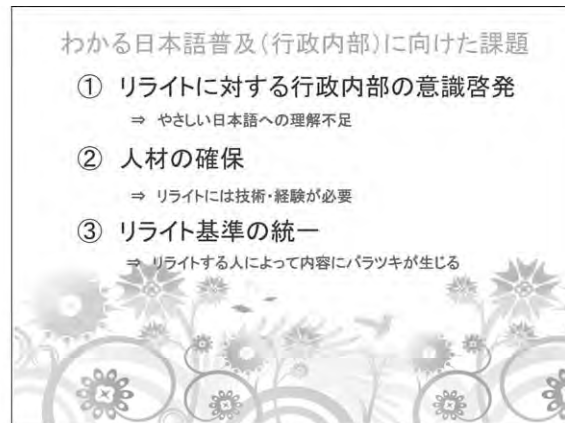
日本語を学びたいと考えている人…87%

⇒ このような人々に対し、「やさしい日本語」による情報提供を行うことにより、情報伝達のカバー率が上がる可能性がある



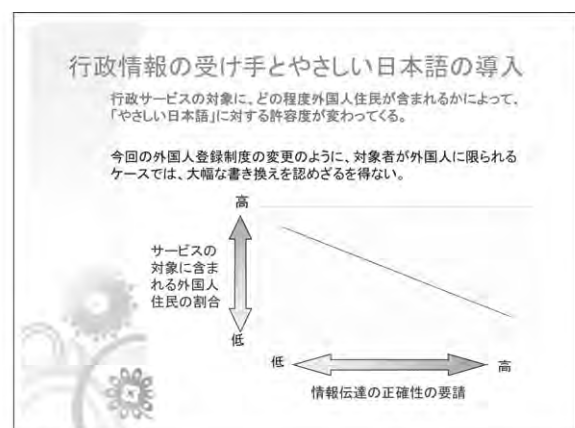
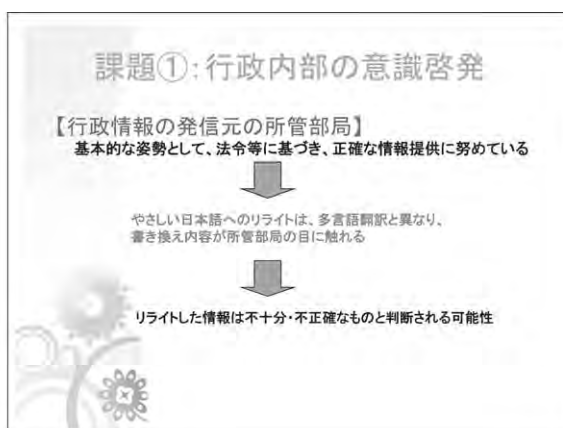
Ⅲ. わかる日本語普及（行政内部）に向けた課題

行政からの情報発信につなげていくためには、以下の3つの課題がある。



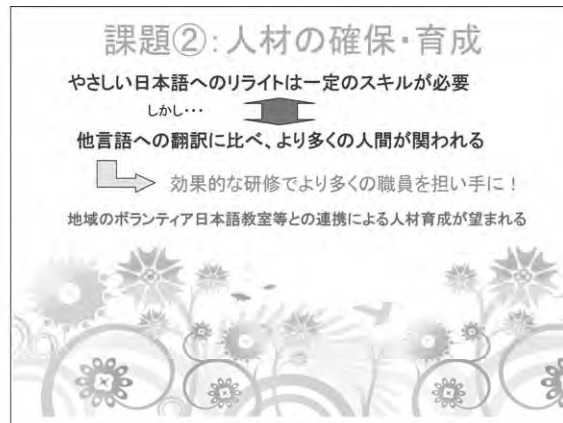
① リライトに対する行政内部の意識啓発

- ・「やさしい日本語」がなぜ必要かということへの理解不足がある。
（情報公開の要望が高まり、わかりやすい表現になってきてはいるものの、外国人区民向けの「やさしい日本語」とは異なる。）
- ・行政の基本的な姿勢として、法令等に基づき、正確な情報提供に努めている。
⇒ 多言語翻訳と異なり、リライトした情報は不十分・不正確なものと判断される可能性がある。
⇒ なるべく情報をタイムリーに渡すためにはどうすればよいか。
- ・行政サービスの対象に、どの程度外国人住民が含まれるかによって、「やさしい日本語」に対する許容度が変わってくる。
（サービスの対象に含まれる外国人住民の割合が大きくなると、許容度があがる）



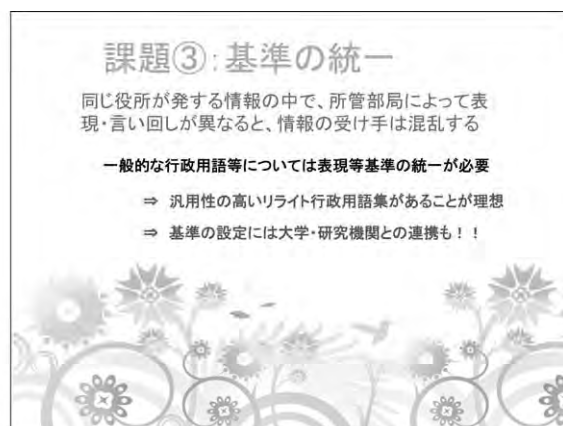
② 人材の確保

- ・リライトには一定の技術・経験が必要。
- ⇒ ただし、身につければ、他言語への翻訳に比べ、多くの人間が関われる。
- ⇒ 具体的に取り組むためには、地域ボランティア教室等との連携が望まれる。



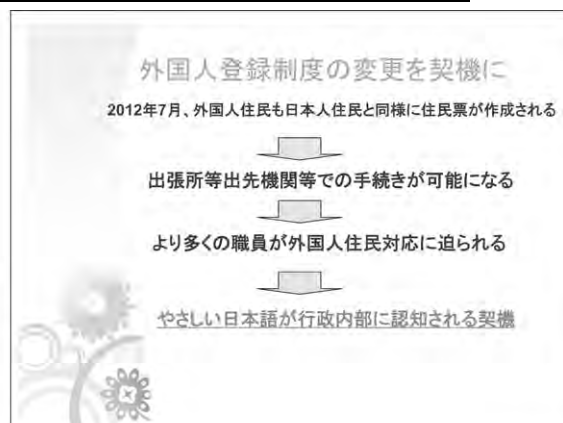
③ リライト基準の統一

- ・所管部局によって表現・言い回しが変わらないよう、基準の統一が必要。
- ・リライトする人によって内容にバラツキが生じ、受け手も混乱してしまう。
- ⇒ 汎用性の高いリライト行政用語集があることが理想。
- ⇒ 基準の設定には大学・研究機関との連携も必要。



Ⅳ. 外国人登録制度の変更を契機に

- ・制度の変更により、外国人住民が訪れる場所も広がってくる。
- ⇒ より多くの職員が対応に迫られる。
- ⇒ 「やさしい日本語」が行政内部に認知される契機になる。



● パネルディスカッション（梶村さん・小川さん・小澄さん）

＜庵先生ご欠席のため、急遽、杉並区交流協会事務局長の小澄龍太郎氏にご参加いただきました＞

① 報告を受け、問題だと思うことは

梶 村：

情報を求める多様な対象者に対して、日本語のレベルをどう捉えてどのように情報を出すのが難しい。行政サイドや外国人の人たちが集まって、こういうものはこのぐらいのレベルで、どういう語彙を使ってどうしていこうかということを考える機会を作って進めていってほしい。また、高齢者の方が読みやすい文章というの、「やさしい日本語」につながるのではないかと。外国人だけではなく、高齢者やいろいろな障害を持った方への情報の伝達に関わる部署でも、このような援助が必要ではないかと思う。

小 澄：

行政の窓口は意識改革が必要であり、全国的なムーブメントにしなければならない。日本人と外国人との共通言語としての「やさしい日本語」という明確な考え方で作られて、その指針から各方向に進んでいけば行政の窓口も変わるのではないかと。

② 小澄さん自身が気をつけていることは

小 澄：

気をつけてはいるものの、まだまだスキルが足りないので、学んでいかなければならない。また、今現在取り組んでいることとして、学校でのおたより等がわからないという要望が多い。これからどんどん作り変えていかなければならない。



小澄 龍太郎 氏

③ 「安心の鍵を貸す」というタイトルのチラシについて

小 川：

外国人の方が家を借りるのが非常に難しいということを受け、大家や不動産業者の方を対象にシンポジウムを行う。日本人を相手に考えるとインパクトのあるタイトルでも、外国人にはわかりにくいということが随所にあるのではないかと。日本語を他言語に直訳すると、文化的背景があるので伝わらないことがある。「やさしい日本語」を推進するに当たっては、考慮が必要。また、子ども手当の「手当」と「助成」のように日本人でも区別がわかりにくいような用語があるなかで、「やさしい日本語」を進めていかなければならない。

④ 全国統一のリライト基準作りは困難ではないか。

梶 村：

まずは、自治体レベルで具体的なことをやっていく、必要性のあるところで、必要なことをやっていくことが重要。それを発信することで、そのモデルが全国レベルに広がっていくのであり、それが必要なのではないかと。庵先生の「公文書書き換えプロジェクト（ほんやくこんにゃくプロジェクト）」や『にほんごこれだけ！1・2』も参照。現在「わかる日本語研究会」を発足し、多様なメンバーで議論を行っている。



⑤ 一歩具体的に進めるにはどうすればいいか。

小 川：

まずは行政の組織内において、誰もがこの部署に関わる可能性があることを考え、組織として横断的に問題を捉えるやりかたを考えていかなければならないと思う。また、外国人住民は災害時要援護者になりやすいが、ある時からサポートする側にかわる。ボランティアにも積極的で大きな役割を担うので、「支援が必要」という立場だけではなく、一緒に地域を作っていくという観点で歩んでいくという姿勢が必要で、そのために日本語を用いるとすれば、「やさしい日本語」が重要である。

⑥ 大田多文化共生推進センターについて

小 川：

多言語での相談窓口を設けている。その他、子ども向けの日本語教室や、通訳の派遣などの事業を行っている。運営は、区のボランティアの方々をお願いしているので、ご興味のある方はぜひ来てほしい。

⑦ 来年度に向けて

梶 村：

方向性としては、何かの役に立つような形で、皆さんが集まって話しあい、できれば一つのモデルケースにできたらいいなと思っている。そのためには、いろいろな部門の方のご協力をいただきながら、精力的に発信し、進んでいきたい。

「わかる日本語」の定義

日本語を母語としない人（受け手）に対して発信する日本語の情報を、そのまま「やさしい日本語」に直すのではなく、受け手に「分かりやすい」「解りやすい」日本語として発信することを目指すために、「わかる日本語」としています。その観点から基本ルール・目安を求めています。

現在「やさしい日本語」の用語が広く使われています。それはそれで意義がありますが今回の調査でも出ていますが「やさしい日本語」のレベルを“小学校2,3年生が理解できる日本語を使う”としているところが複数見受けられます。しかし対象は“日本語を母語としない人”で“小学生”ではありません。その点で基本的な認識を誤る可能性があります。

こうしたことも加味して「わかる日本語」としています。

2012/2/3

1

「やさしい日本語」の本質と その必要性

一橋大学国際教育センター准教授 庵 功雄

2012/2/3

2

1. 「やさしい日本語」が求められる背景

- ・定住外国人の増加
- ・（背景）人材移動のグローバル化、
- ・日本の少子高齢化、
- ・生産年齢人口（15～64歳）の減少
- 海外に成功の場を求める外国人と日本社会の要
- ・請の方向性が一致
- この人たちが日本で自己実現できる可能性を保証
- ・する必要性
- 「やさしい日本語」を用いてこの問題に取り組む

2012/2/3

3

1. 「やさしい日本語」が求められる背景

- ・外国人に対する情報提供
- ・多言語化は理想（緊急時には不可欠）だが、
- ・完全な多言語化は困難
- 「やさしい日本語」を情報提供の選択肢の1つとする必要性（cf. 岩田2010）
- 公文書書き換えプロジェクト
- ・国際交流・協会TOKYO連絡会編（2012印刷中）
- ・『日本語を母語としない人への情報発信等に関する実態調査 報告書』

2012/2/3

4

1. 「やさしい日本語」が求められる背景

- ・「地域型初級」の必要性
- ・学校型日本語教育と地域型日本語教育（尾崎2004）
- ・「学校型」における「初級」の目安は300時間
- ・「地域型」の標準は週2時間→「初級」を3年？
- 地域型日本語教育の実情に合った「初級」（「地域型初級」）の必要性

2012/2/3

5

2. これまでの「やさしい日本語」研究と本研究

- ・減災のための「やさしい日本語」（減災EJ）
阪神淡路大震災時の情報伝達
英語は伝わらず、日本語は難しい
→「やさしい日本語」
- ・松田他（2000）：ニュースをやさしくすることで内容に関する質問の正答率が30%から90%に上がる

2012/2/3

6

2. これまでの「やさしい日本語」研究と本研究

減災のための「やさしい日本語」（減災EJ）

A <原文>

けさ5時46分ごろ、兵庫県の淡路島付近を震源とするマグニチュード7.2の直下型の大きな地震があり、神戸と洲本で震度6を記録するなど、近畿地方を中心に広い範囲で、強い揺れに見舞われました。

B <言い換え文>

今日、朝、5時46分ごろ、兵庫、大阪、などで、とても大きい、強い地震がありました。地震の中心は、兵庫県の淡路島の近くです。地震の強さは、神戸市、洲本市で、震度が6でした。

5. 「やさしい日本語」と「にほんごこれだけ！」

- ・おしゃべり型教材としての「にほんごこれだけ！」
- ・地域型では(学校型と同じような)文型積み上げ式は無理。
- ・→教材はおしゃべり型が適している。
- ・→単なるおしゃべりではなく、そこに文法が埋め込まれている
(隠れ文法)。

5. 「やさしい日本語」と「にほんごこれだけ！」

- ・「これだけ！1」の特徴
- ・活用がない。
- ・全ての項目が産出レベル。
- ・助詞と丁寧の世界。
- ・→このレベルでもコミュニケーションは可能。
- ・(学校型の初級との違い)

5. 「やさしい日本語」と「にほんごこれだけ！」

- ・「これだけ！2」の特徴
- ・活用が現れる。(テ形、辞書形、タ形、ナイ形)
- ・理解レベルの項目が現れる。
- ・→理解レベルの項目のために「活動編」が設けられている。
- ・→理解レベルの項目は聞いてわかればいので、「これだけ
！」の部分がない。

6. 公文書書き換えプロジェクト

- ・Step1, 2を学んだ外国人が、自治体が発行している公文書(お知らせ)を読めるようにする。
- ・最終的には、公文書を「やさしい日本語」に書き換える自動翻訳システムを開発する(ほんやくこんにやくプロジェクト)。
- ・自治体から提供された公文書を日本語教育経験10年以上の日本語教師の手で書き換える。

6. 公文書書き換えプロジェクト

- (原文)ご連絡のない場合は、お子さまの健康状態をお尋ねさせていただくため、市が依頼した母子保健地域推進員や市保健師がご自宅にお伺いする場合もございますのでご理解ご協力をお願いします。
- (書き換え例)連絡がないときは、あなたのお子さんが健康かどうかを調べるために、市の人が家に行くことがあります。
- 命題内容を損なわない範囲で大胆に表現を短縮する。

6. 公文書書き換えプロジェクト

- ・(原文)携帯電話の処分は、通信事業者と製造メーカーが共同で運営し、再資源化を目的とした「モバイル・リサイクル・ネットワーク」に協力するため、できるだけ販売店へ持ち込みをお願いします。
- ・(書き換え例)携帯電話のリサイクルに協力してください。捨てるときは、できるだけ携帯電話を売っている店へ持って行ってください。
- ・文はできるだけ短く分割する。

6. 公文書書き換えプロジェクト

- ・(原文)一時的な経済負担を軽減するため、分娩に伴う費用として本人に代わって市が医療機関へ直接出産育児一時金を支払います。
- ・(書き換え例)赤ちゃんを産むときにお金がたくさんいるので、市が病院にお金をはらいます。
- ・原文の意味を取って、できるだけわかりやすく書き換える。

6. 公文書書き換えプロジェクト

- ・「やさしい日本語」で書き換えた文章は、外国人だけでなく、高齢者、障害者、子どもなどの情報弱者にとっても有用。
- ・→自治体と連携して、アウトプット段階でやさしくなるように工夫をする。(例:語彙の書き換え基準を自治体と協議して決定する)

- ・参考文献
- ・庵 功雄(2009a)「地域日本語教育と日本語教育文法―「やさしい日本語」という観点から―」『人文・自然研究』3、一橋大学 (<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/17337/2/jinbun0000301260.pdf>)
- ・庵 功雄(2009b)「推量の「でしよう」に関する一考察」『日本語教育』142、日本語教育学会 (<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/22081>)
- ・庵 功雄(2012印刷中)「「やさしい日本語」の本質とその必要性」『東京日本語ボランティアネットワーク(TNVN) ニュースレター』
- ・庵 功雄・岩田一成・筒井千絵・森 篤嗣・松田真希子(2010)「「やさしい日本語」を用いたユニバーサルコミュニケーション実現のための予備的考察」『一橋大学国際教育センター紀要』創刊号、一橋大学 (<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/18797/1/kokusai0000100310.pdf>)
- ・庵 功雄・岩田一成・森 篤嗣(2011)「「やさしい日本語」を用いた公文書の書き換え」『人文・自然研究』5、一橋大学 (<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/19016/2/jinbun0000501150.pdf>)
- ・イ・ヨンスク(2009)「外国人が能動的に生きるための日本語教育」『AJALT』32、国際日本語普及協会
- ・井上史雄(2011)「命取りの命令形」『日本語学』30-10、明治書院

- ・参考文献
- ・岩田一成(2010)「言語サービスにおける英語志向」『社会言語科学』13-1、社会言語科学会
- ・尾崎明人(2004)「地域型日本語教育の方法論的試論」小山悟他編『言語と教育』くろしお出版
- ・佐藤和之(2004)「災害時の言語表現を考える」『日本語学』23-8、明治書院
- ・寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- ・野田尚史(2007)「目的によって変わる「文法」」
- ・http://www.gengosf.com/dir_x/modules/wordpress/index.php?p=69
- ・野田尚史(2008)「コミュニケーションのための日本語教材」
- ・<http://www.soc.nii.ac.jp/nkg/themekenkyu/tabunka/4kai.pdf>
- ・野元菊雄(1990)「簡約日本語」『文林』26、松蔭女子学院大学
- ・松田陽子・前田理佳子・佐藤和之(2000)「災害時の外国人に対する情報提供のための日本語表現とその有効性に関する試論」『日本語科学』7、国立国語研究所
- ・山内博之(2009)『プロフィエーションから見た日本語教育文法』ひつじ書房
- ・山田 泉(2002)「第8章 地域社会と日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社

ご清聴ありがとうございました

分科会 3

●テーマ 東日本大震災から何を学ぶか

～地域の取組と外国人支援のあり方～

- ねらい 東日本大震災発生から 11 ヶ月経ち、地震発生時から外国人支援をどのように行ってきたか、被災地から具体的に報告されつつあります。一方、首都圏では 3.11 大地震と集中豪雨による帰宅困難問題が発生しました。首都直下型地震や東海・東南海地震が間近に迫る東京で、「外国人が安心して暮らせる東京」を目指し、これからの災害に備え外国人支援のあり方について話し合います。

●コーディネーター 江原 幸彦 (共住懇)

●パネリスト 古家崎 結一 (東京都総務局総合防災部防災管理課計画調整担当係長)

遠井 基樹 (港区防災危機管理室防災課長)

市川 裕之 (小平市市民生活部地域文化課課長補佐)

ニティン・メハラ (インド、武蔵野市在住)

イーラン (中国、足立区在住)

山川クリシュマ (ネパール、足立区在住)

●参加者数 41 名

■分科会の構成■

- 防災に対する地域の取組の紹介
- 在日外国人に震災時の経験を聞く
- ディスカッション ～外国人支援について考える～
- まとめ

● 防災に対する地域の取組の紹介

江原 幸彦 (共住懇)

防災に対する取組は、「自助」(自分自身と自分の家族を守る)、「共助」(地域でお互いに助け合う)、「公助」(行政の側が防災に備える)の三つに分けられる。この中でも、共助に焦点をあて、行政の担当者や外国人らから、現状について話してもらい、身の回りでどのように防災に取り組んでいったら良いかを考えていきたい。自分自身は建築を専門として仕事をしている。共住懇において外国人支援も行っている。その視点から、行政に提言も行っている。



江原 幸彦 氏

東日本大震災から何を学ぶか

国際化市民フォーラム IN TOKYO

1

減災のための「自助・共助・公助」

- ◎ 阪神・淡路大震災、中越・中越沖地震、東日本大震災の教訓を活かす
- ◎ 地震発生時から数週間は行政は機能しない
→大地震が起こる前に体制作りが重要

2

事前にできる「自助・共助」

- ◎ 自助
非常持出袋、非常食、避難場所を確認しておく
非常時に家族同士で安否確認できるように話合う
- ◎ 共助
地域国際交流協会・外国人支援NGOの役割
安否確認、行政情報の提供、翻訳・通訳
行政手続き支援 やさしい日本語・多言語版
書式の準備
救助、避難、防犯を行える体制をつくっておく
→「災害時外国人支援センター」の設置

3

自治体への提言①

- ◎ 「災害時外国人支援センター」の設置
区内10箇所出張所に「外国人支援センター」を設置する。
- ◎ 行政手続き支援
事前にやさしい日本語表記または多言語表記の書式を準備し、手続きの支援をする。
- ◎ 語学ボランティア（通訳者・翻訳者）の確保
語学ボランティア（翻訳者・通訳者）を確保する。
- ◎ 安否確認の確立
自治体による安否確認を確立する。HP、Twitter、FACEBOOKによる情報提供。災害用伝言ダイヤル、携帯電話各社の災害伝言板を周知する。
- ◎ 外国人の生活習慣の把握
外国人の生活習慣の調査、防災訓練、避難所のルールを周知する。

4

自治体への提言②

- ◎ 自治体と外国人支援団体との協定の締結
自治体は災害時に外国人を支援する団体、企業、教育機関、店舗等と協定を締結しておく。
- ◎ 被災地の防犯パトロール
地震発生後に日本人と外国人とによる防犯パトロールを行う体制を整えておく。
- ◎ コミュニティFMによる地域情報の提供
災害時にコミュニティFMを使って災害時の地域情報を多言語で提供する。
- ◎ 自動車・ガソリン、数台の携帯電話、電話回線、ファックス
- ◎ 東京都国際交流委員会「災害時の外国人支援マニュアル」

5

プログラム

- ◎ 外国籍住民の声
・地震発生後3日間に外国人は何をしたか？
・外国人はどんなことに困ったか？
何をしてほしいか？
- ◎ 行政の防災体制
・東京都の防災体制
・港区の防災体制
- ◎ パネルディスカッション
・パネリスト同士の討論
・会場からの質問

6

(1)「東京都防災対応指針」を中心に都の取組を紹介

古家崎 結一さん（東京都総務局 総合防災部 防災管理課 計画調整担当係長）

東日本大震災以降、ボランティアの方々に非常にお世話になっているのでお礼を申し上げたい。

以下、配布資料に沿ってお話を進めさせていただきたい。

（当日の発表内容については、以下の資料をご参照ください）



古家崎 結一 氏

「東京都防災対応指針」の概要

1 防災対応指針策定の背景

- 防災対応指針策定の趣旨
東日本大震災の教訓等を踏まえ、今後の東京の防災対策の方向性と具体的取組を示す。
- 東日本大震災に対する基本的認識
想定外の巨大地震、大津波に加え、原子力発電所事故も重なった未曾有の複合的災害
遠隔地の地震が東京にも深刻な影響を引き起こす。
- 首都東京の防災力向上の必要性
従来にない災害の教訓を踏まえて、改めて、防災力を一層向上し、首都直下地震等への備えを固め直す。

2 東京を襲う地震像

- 首都直下では、陸側のプレートの下に、東から太平洋プレートが、南からフィリピン海プレートが沈み込んでいる。
- また、これらのプレート境界では、プレート先端が跳ね上がることでM8クラスの海溝型地震が発生
- 南関東では、200～300年間隔で発生する関東大地震クラスの地震の間に、M7クラスの直下型地震が数回発生すると想定
- 首都圏以外の地震による電力供給停止や物流の途絶などの連鎖的被害の発生も懸念される。

< 首都直下地震 >

東京湾北部地震（M7.3）
プレート境界多摩地震（M7.3）
など



< 海溝型地震 >

大正型関東地震（M7.9程度）
元禄型関東地震（M8.1程度）
など



< 活断層で起こる地震 >

立川断層帯地震（M7.4）
など



< 連鎖的被害が懸念される地震 >

東海・東南海・南海連動地震、東北地方太平洋沖地震、新潟県中越沖地震など

こうした地震によるリスクに加え

台風や高潮などの自然災害が複合的に発生する可能性も否定できない。

こうした危険性を見据えた上で、災害への備えを固め直すことが必要

3 東京の防災対策の目指すもの

東京の防災対策の目的

都民の命を守ること

昼夜を問わずあらゆる「都民」を対象に、その生命の安全を確保

都市の機能を維持すること

日本の頭脳・心臓である首都東京の機能を維持

東日本大震災の教訓

未曾有の大震災に対応するためには、自助・共助・公助それぞれの取組の強化はもとより、それを担う個々の主体の連携や施策の相互補完など、東京の総力を結集した防災対策の構築が必要

今後の防災対策の方向性

多様な主体が個々の防災力を高めるとともに、
主体間の連帯を強化する

<施策の具体例>

- ・住民、事業者等の地域の連帯に根ざした防災隣組の構築
- ・企業、行政機関など社会全体の連帯による帰宅困難者対策の推進

あらゆる事態に備え、個別施策の徹底強化と
施策の複線化・多重化を促進する
(バックアップの確保)

<施策の具体例>

- ・道路やライフラインのネットワーク構築による補完機能の確保
- ・木密地域の整備促進と消火体制の充実強化

東京の防災力を高度化

< 防災対応指針における主な対応策の概要 >

多様な主体が個々の防災力を高めるとともに、
主体間の連帯を強化する

◇地域の連帯の再生による防災隣組の構築

- ・先進的・効果的取組を「東京都防災隣組(仮称)」として認定
- ・祭りや新しい情報提供ツールを活用し、モデル地区を支援

◇社会全体で取り組む帰宅困難者対策の再構築

- ・帰宅困難者に関する条例を制定し、施設内保護等を徹底
- ・官民をあげて、一時待機施設を量的・質的に拡大

◇発災時の安定的な情報通信の確保

- ・通信ルートの複線化に向け、Wi-Fiの実証実験を実施
- ・防災行政無線等の防災関係機関の通信手段を多様化

◇流通網の途絶に備える物流・備蓄対策の推進

- ・物流・備蓄対策の再構築に向けて、関係事業者も巻き込んで「物流・備蓄プロジェクト」を推進

相互に連携して複合的に施策を展開

あらゆる事態に備え、個別施策の徹底強化と
施策の複線化・多重化を促進する
(バックアップの確保)

◇木密地域の不燃化に向けた総合的な対策の推進

- ・まちづくり施策や税制など新たな手法による整備推進と住民の意識改革
- ・消防水利の確保など、火災への備えの強化

◇事業者と連携した大都市における防災拠点の整備促進

- ・都市開発にあわせて、民間の避難場所や発電設備の設置を誘導
- ・公園の整備拡充と発災時の機能強化を推進

◇東京湾沿岸の水害への備えの強化

- ・高潮対策センターの2拠点化、水門・防潮堤等の耐震強化
- ・大規模水害時の避難体制を強化する広域避難プロジェクトの推進

◇エネルギー確保の多様化による都市機能の維持

- ・高効率の天然ガス発電所の整備の検討
- ・自立・分散型発電の設置と燃料の安定供給対策を推進

東京都防災対応指針に掲げる防災対策

多様な主体の連帯	施策の複線化・多重化
1 地域の連帯の再生による防災隣組の構築 防災隣組の構築 2 社会全体で取り組む帰宅困難者対策の再構築 徒歩帰宅者の発生抑制、一時待機施設等の確保、情報通信基盤の強化、帰宅支援策の強化 3 発災時の安定的な情報通信の確保 行政機関内の情報連絡、外部機関との情報連絡、報道機関との連携、住民への情報提供、情報通信基盤の強化〔再掲〕 4 流通網の途絶に備える物流・備蓄対策の推進 物資の安定調達、燃料の安定調達、流通情報の提供、都民・事業者等による備蓄の推進、物資の種類・配置、備蓄拠点の配置、物資受入・搬出等 5 首都東京の消防力の徹底強化と危険物対策の推進 消防力の向上、消防水利の確保、消防団の災害活動支援、危険物施設対策、高圧ガス施設対策、化学物質対策 6 多様な主体の応急対応力の強化 都の初動態勢、警視庁の災害対応能力の向上、事業継続計画、防災訓練 7 強固な広域連携体制の構築による相互補完機能の確保 全国知事会等、九都県市、基礎自治体 8 住民、事業者等の防災力の向上 災害時要援護者対策、ボランティア活動の環境整備、事業者の取組の促進、防災教育 9 住民の避難対策の充実 発災時の都外避難者への情報伝達、避難所のすみ分け、避難所の衛生管理、外国人への情報提供、動物救護活動	1 木造住宅密集地域の不燃化に向けた総合的な対策の推進 木密集地域の整備促進と意識啓発、消防水利の確保〔再掲〕 2 事業者と連携した大都市における防災拠点の整備促進 民間の活力も活用した防災拠点整備の促進、防災拠点等となる公園等の整備 3 東京湾沿岸の水害への備えの強化 被害想定検証、水門等の耐性の検証、東京港の耐震性の向上、情報連絡体制の確保、避難誘導 4 発災後の医療機能確保に向けた対策の強化 医療機能の確保、医療機関情報の把握、広域的な医療連携、患者搬送に係る連携体制の構築、多様な人員体制の整備等、高齢者・障害者等に対する支援の継続 5 交通ネットワークの確保に向けた対策の強化 道路ネットワーク整備等、道路・橋梁の安全確保、交通規制、鉄道の安全確保と早期復旧 6 発災に備えたライフラインのバックアップの確保 上下水道、電気、ガス、通信の施設の耐震化・液状化対策等、トイレの確保及び処理 7 高度な耐震性を備えた都市づくり 建築物の耐震化、緊急輸送道路沿道建築物の耐震化、エレベーターの耐震化、非構造部材や家具類による被害防止、避難所の被害防止 8 住民の生活安定化のための対策の充実 かき処理、秩序維持、災害証明、義援金配分、応急仮設住宅、災害救助法の適用、遺体の取扱
10 放射性物質による影響への対策の推進 国による対策の強化、安全基準の策定、都の体制整備等、風評被害への対応、安心安全のための相談・情報提供、安全な生活環境の確保 11 流通網の途絶に備える物流・備蓄対策の推進 物資の安定調達、燃料の安定調達、流通情報の提供	9 エネルギー確保の多様化による都市機能の維持 電力の確保、燃料の安定調達、事業の継続確保、情報連絡体制 10 長周期地震動対策の強化 長周期地震動による影響、危険物施設対策〔再掲〕、室内の安全確保 11 液状化対策 12 島しょの津波対策
首都直下地震への備え	三連動地震への備え

(2) 東日本大震災の教訓から、いくつかの提案

遠井 基樹さん（港区防災危機管理室防災課長）

東日本大震災後、港区からも職員を派遣し続けている。ボランティアの方々にもお礼申し上げたい。



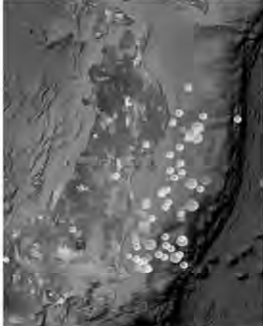
平成23年度 国際化市民
フォーラム in TOKYO
第3分科会

「東日本大震災から何を学ぶか」
～ 港区の取り組み ～

平成24年2月18日(土)
港区 防災危機管理室 防災課長
遠井 基樹

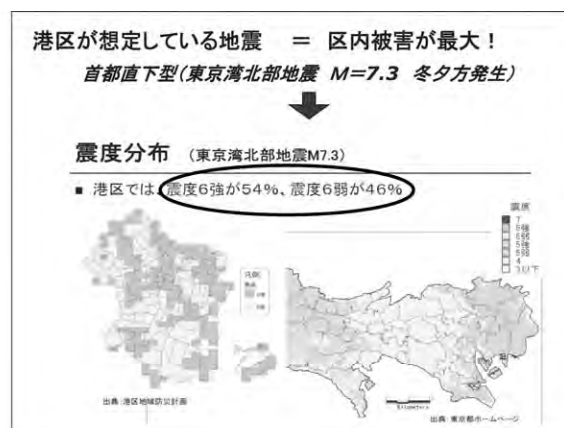


東日本大震災



発生	2011年3月11日
発生時刻	14時46分18秒
震央	三陸沖 北緯38度6分12秒 東経142度51分
震源の深さ	24km
規模	Mw9.0
最大震度	震度7: 宮城県栗原市
地震種類	海溝型地震
震源域	南北500km 東西200km
余震	1月1日08時現在 震度6強2、6弱2回、5強9回、 5弱35回、4 220回 被害 12月29日現在 死者 15,844人 行方不明者 3,451人 ☆特徴☆ ① 死因は水死 ② 大津波が発生

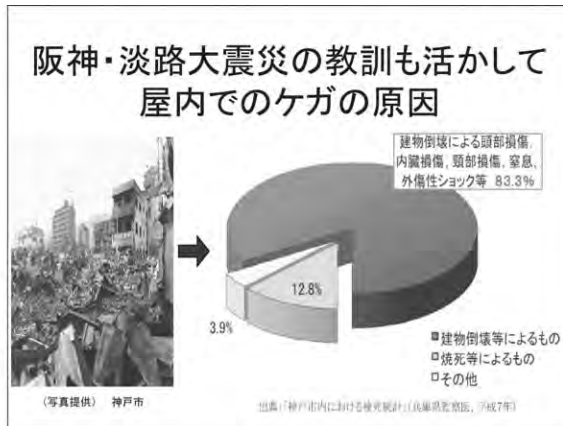
首都圏で地震が起きた場合、2ランク上の揺れが襲うと考えられる。以下、港区の取り組みについてお話したい。



港区の地震対策について、震度6弱の揺れにおいて、地震対策をした場合としなかった場合を比較した画像を紹介する。

地震対策をしてある場合は、部屋の家具がほとんど移動しなかった。地震対策をしてない場合は家具が大きく移動し、危険な状態である。港区では1万5千円まで地震対策を補助している。





港区の助成制度 家具転倒防止器具の無償支給

● 無償支給の対象者

区民(外国人登録者も含む)

● 概要

家具転倒防止突っ張り棒、ガラス飛散防止フィルムなどリストから申請者が選択し、50ポイント(1万5千円相当)以内を補助。

● 留意事項

一世帯につき、1回の補助です。



震災の際、自宅が破壊されたら避難所に行くが、自宅が無事ならそこにとどまるのがルール。自宅には3日分の備蓄が必要。高層マンションについては、エレベーターが復旧するまで上り下りできないので、マンション全体でプラス4日くらいの備蓄が必要。

i 基本の対策

各家庭で水や食料を備蓄する

基本 = 3日間分

- 自宅が破壊されたら避難所に行く。
自宅が無事なら、自宅にとどまるのがルール！
- 過去の震災では、全国から救援物資が概ね3日後に届いている。
- 全国から届いた救援物資は、「避難所」で配給される。

港区の助成制度 防災用品のあっせん

● あっせん対象者

区民(外国人登録者も含む)及び区内在勤者

● 概要

家庭用の防災用品を特別価格であっせんし、品物は区内自宅又は勤務先に配達されます。

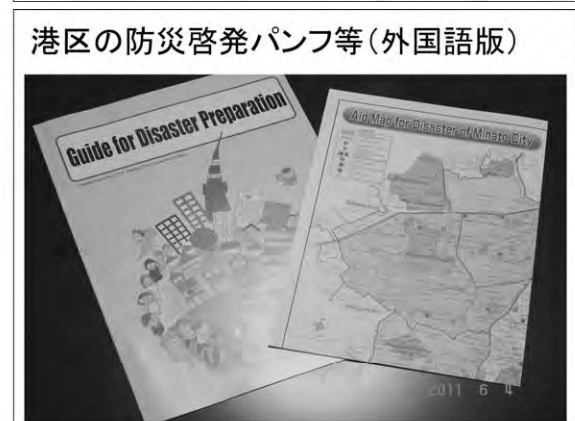
● 留意事項

- ① 代金は商品引換え方式のみの扱いとなります。
- ② 申込みは、「はがき」又は「FAX」で指定店あて申込みする方法のみ。(ネット販売等はしていません。)

i 基本の対策

避難所などを確認しておく

- 「防災マップ」などで、最寄りの避難所の位置を確認し、実際に歩いて行ってみる。
- 避難所は、救援物資の配給所にもなる。
- 自宅が破壊されたら避難所に行く。
自宅が無事なら、自宅にとどまるのがルール！
- 地震を知らない国の人→防災訓練に参加を



港区の防災行政無線放送

- 屋外無線放送塔の整備
区内125箇所に設置



日本語と英語の2ヶ国語で放送

- 光化学スモッグ注意報・警報
- 区内で強い雨が降っている
- 古川の水位が増して危険
- 区内で震度4以上の地震
- 津波警報・注意報



放送内容確認電話 (5401)0742

ii 高層住宅の対策

皆で協力し水などを更に備蓄する

各自の家庭 = 原則どおり 3日間分
+
全体で協力 = 4日間分
7日間分

(7日備蓄の理由) エレベーター復旧に要する平均日数

注: 震災後エレベーター復旧は「1棟1台ルール」

ii 高層住宅の対策

皆で学習会などを実施する

「教材」は港区の資料を活用!



「高層住宅等防災ハンドブック」

巻末に区作製のDVD「必ず来る大震災! 今! 備えること!」が付いています。

マンション管理会社の方にも出席を要請し、マンション探検を!

大使館が多く存在する港区では、外国人の防災対策のために、英語、韓国語、中国語版の防災啓発パンフレットを作成している。

また港区では、区民の為に避難所に帰宅困難者が殺到した。火事などが起こっている地域を歩いて帰るのは非常に危険である。



帰宅困難者対策

東日本大震災のあと、何故、帰ったか?

理由 その1 家族(特に子供)が心配だったから

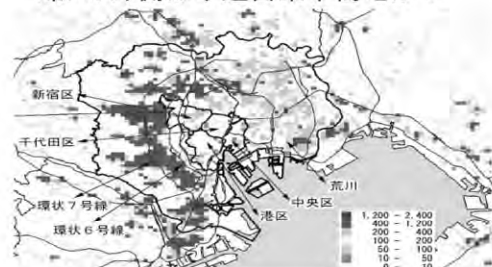
→ <対策> 家族との連絡方法を決めておく
(例) 災害伝言ダイヤル、災害時伝言板など

理由 その2 金曜日だった。明日は土曜で休暇。遅くても大丈夫

→ <対策> 次の大地震でも、歩いて帰れるとは思わない事
(例) 東京湾北部地震 → 港区の震度は6弱
(例) 東日本大震災 → 港区の震度は5弱

帰宅困難者対策

環7の外側は木造密集市街地が!



港区では対策として条例を設定した他、帰宅困難者対策の訓練を行った。

帰宅困難者対策

品川駅周辺滞留者対策訓練




誘導訓練
（改札口とコンコース）

一時待機訓練
（ホテル内）

帰宅困難者対策

品川駅周辺滞留者対策訓練（続き）




搬送訓練
（郵便集配車を活用）

品川駅周辺滞留者対策推進協議会の
会議風景（訓練の実施準備会議）

「天災は忘れた頃にやってくる」、「喉元すざれば熱さを忘れる」という言葉を思い出して、防災についてもう一度考えてほしい。

日本の有名な諺

「天災は忘れた頃にやってくる！」

寺田寅彦（1878年～1935年）

文明が進むほど、災害に見舞われた時の被害は大きくなる。
例えば、地震で家が壊れる場合、旧石器時代なら、一家族の被害だけで済むかも知れない。だが、現代はアパートに複数の家族が住んでいる。アパートの倒壊は、そこに住む全ての家族に被害をもたらす。

（中略）

我々、人間は「物を忘れる」という特質を持つ。人生でいやな事を忘れることは、毎日を送るで、有益な場合が多い。
しかし、災害の記憶を忘れることは、良くない事である。「のど元過ぎれば熱さを忘れる。」という、日本の諺がある。震災直後はよく覚えていたのだが、ひと月も経つと、もう、その時の怖さを忘れてしまう。日本では繰り返す、同じ場所で、津波や地震が起きる。
「天災は、忘れた頃にやってくる。」
ちょうど、前輪と後輪のある乗り物があって、前輪をやり過ごしたと思った頃、やって来た後輪に、私たちは足を踏まれてしまうのである。

（1934年「国防と天災」）

「防災」とは何か？

港区 = 都心
= コミュニティ
= 「薄い」

キーワードは 「絆」

「防災」とは、「絆」で、「大切な人」を
災害から守ること。

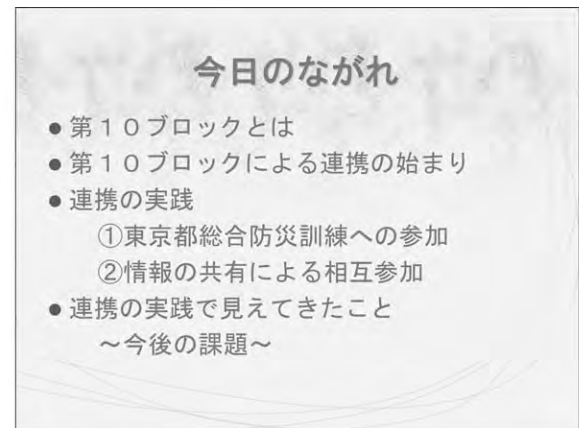
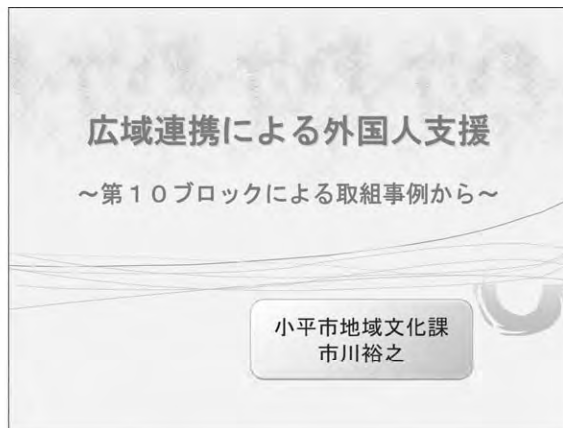


遠井 基樹 氏

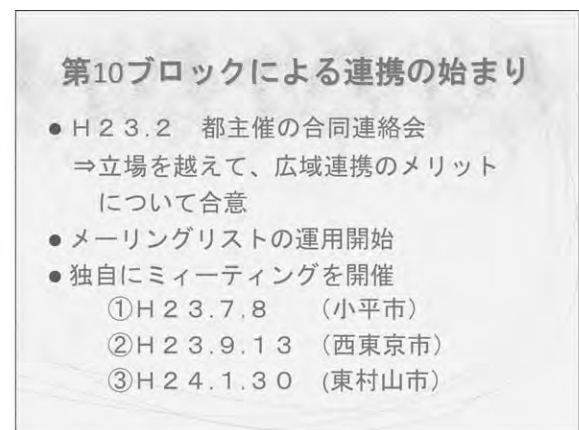
(3) 東日本大震災を踏まえた第10ブロックと総合防災訓練の取り組みの紹介

市川 裕之さん（小平市市民生活部地域文化課課長補佐）

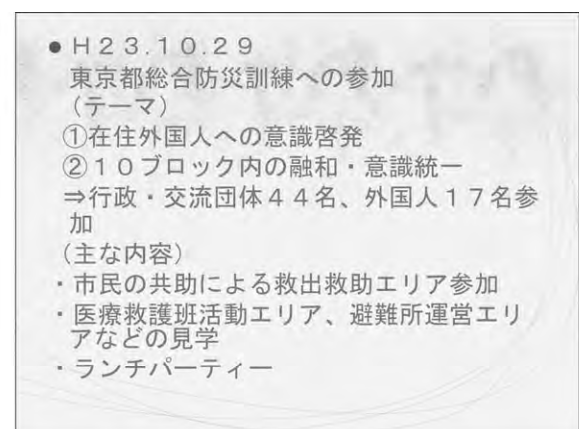
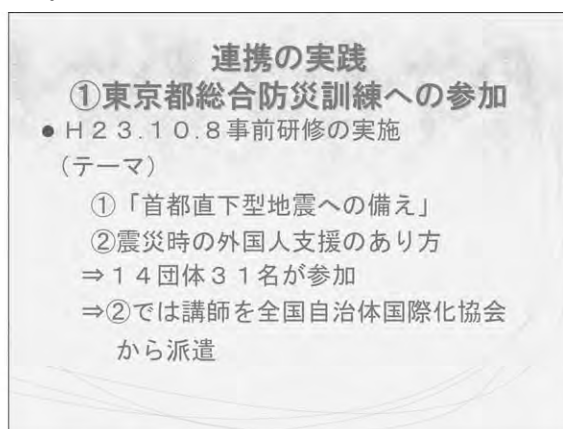
市民の文化交流を担当しており、交流事業を通して防災に触れる機会がある。



東日本大震災以降の第10ブロックの取組について紹介したい。第10ブロックとは、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市、小平市の5市の連携を指す。

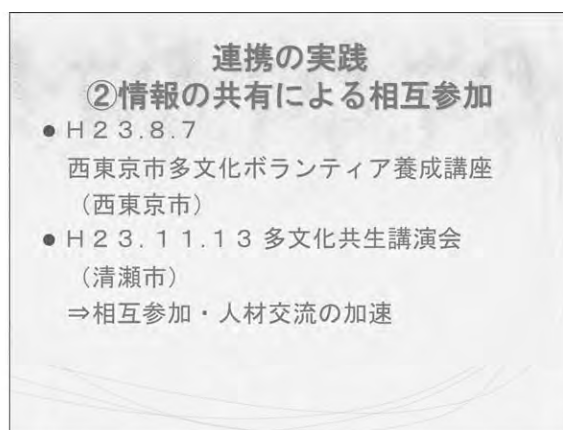


ブロック内で、防災についての勉強会を行っている他、東京都総合防災訓練にも日本人と外国人が参加した。

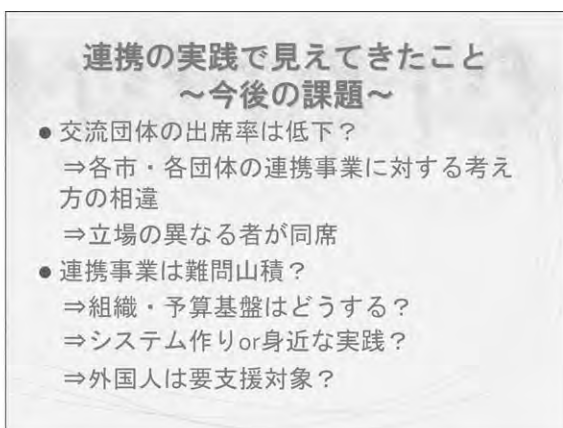




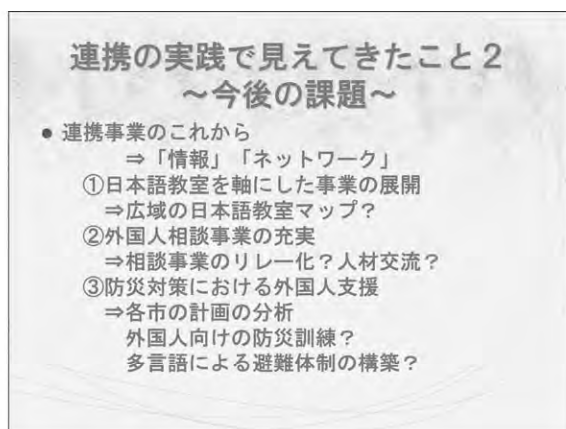
その際言語面でのサポートとして、「やさしい日本語」でチラシを作成し、使用言語ごとにブロックを編成した。第10ブロック内の連携が強まり、相互参加、人材交流が活発化している。



しかし一方で、現在交流団体の出席率が低下しているなど問題点もある。原因としては、異質の方向性を強く持っている団体が複数集まるので、全体の方向性が合いにくいこと。活動への携わり方が、仕事であったり、ボランティアであったりして異なるため、連絡がうまくいかなかったり、取り組み方が違ってくこと。各団体に予算があり、統一した予算が作りにくいことなどが上げられる。また、本当に外国人の方々のために必要なのは、システム作りなのか、身近な実践なのか、という議論もあり、活動の方向性にバランスが取りにくい。



今後は日本の社会にまだ溶け込めていない外国人をうまく取り込んでいくのが課題。そのために、日本語教室を軸にした事業の展開、外国人相談事業の充実、防災対策における外国人支援をしていくことがあげられる。



● 在日外国人に震災時の経験を聞く

ニティン・メハラさん（インド、国分寺在住）

私はインドのIT関連会社で働いています。地震当日は品川のお客さんの会社で働いていた。ここではスウェーデン及びアジア系の外国人が100人以上働いている。自分自身は防災訓練に参加したことがあり、ある程度心得ていた。しかし東日本大震災の時は、地震にどう対処してよいか分かっていない外国人が多いことがわかった。



ニティン・メハラさん

私の妻は全く日本語ができないため、私は妻のことをとても心配した。地震が起きた当時、電話はつながらなかったが、Facebookで連絡をとることができた。Facebookを使って、妻に武蔵境

の友人のところに行くように言った。自分はまず会社に留まったが、夜中に品川からバスに乗って新宿まで出て、朝の5時に友人のところで妻と合流することができた。その後友人の家に留まり、何時間かして妻と自宅に帰った。

地震については一段落したが、原子力発電所の事故についての情報が入ってきた。私は、地震が起こった金曜日から月曜日まで会社を休み、避難所に行った。情報を求めて避難所に行ってみたが、そこには誰もいなかった。日本語は分かるが、災害についての情報は結局英語で得ていた。地震や原発についての情報は、Facebook Group Tokyo Radiation Levelを参照した。ここは日本の報道などを英語に訳して掲載しているFacebookのグループである。

これらの経験をふまえて、日本語ができない人がどうやって情報を得るのか、どういう行動をとれば良いのかが分からないのは問題だと思っている。特に震災当日は、バスや電車の運行情報は日本語でしか手に入らず、外国人にとって頼りの、英語ができる日本人もパニックに陥っており、頼

れなかった。

行政なども、SNSなどで外国人に向けても情報を発信していく必要があるだろう。翻訳で協力できる外国人は自分をはじめとして存在するので、前向きに外国人への情報発信を考えてほしい。

イーランさん（中国、足立区在住）

私は地震の時、細い道を歩いていた。以前に防災訓練に出たことがあったので、地震については心得がある程度あり、まずは冷静になって、広い道に行かなければと考えていた。一番心配したのは、来日してそれほど年数が経っていない娘のことだった。主人の会社からスカイプで連絡を取り、中国の親類に安全であるという連絡をした。20分かけて家に帰ると、家の中は家具が倒れ、ガラスが割れ、冷蔵庫も倒れていた。私は怖くて家の中にいられないと思った。



イーランさん

主人は秋葉原で会社経営をしているので、社員と一緒に会社に留まっていたが、やがて北千住まで1時間かけて歩いて帰ってきた。

家で困ったのは、ガスが止まっていたことだった。地震のときは安全装置が働くということを知らなかったの、初めのうちは周りの家も止まっているのかと思っていた。しかし、近所の人たちに教えてもらい、おかげでガスが無事復旧してよかった。どこに行っても防災の知識と意識を常に

持っているべきだと考えている。また、普段から区役所には非常にお世話になっているが、地震の時もお世話になった。とても感謝している。

山川クリシュマさん（ネパール、足立区在住）

地震の時は会社が休みで、友人とランチをしようと竹橋に向かっていった。地下鉄の中で何も揺れを感じず、地震が起きたことを知らなかった。「出てください」「出てください」と言われて、「一体どうしたら良いの?」と思った。

しばらくして携帯電話がつながり、義母と娘と連絡を取ったところ彼らが非常に焦っており、周りの日本人も慌てているので自分も心配になってきた。自分の二人の子供のことがとても心配で、早く会いたい気持ちでいっぱいだった。



山川クリシュマさん

松戸まで歩くという日本人老夫婦がいた。自分と帰る方面が同じなので一緒に北千住まで行くことになった。自分としては日本人と一緒に安心だったが、彼らは空腹で疲れており放っておけず、自分が持っていた水と食べ物を差し出し、休憩しながらゆっくり歩いた。しかし途中で自宅とは逆の方向に歩いていることを知った。親切な日本人が地図をくれたので、それを見て歩いた。途中で携帯電話の電池が切れ、コンビニに入っても飲み物も食べ物もなかった。

老夫婦を励ましながら長時間歩き、やっと北千

住に着いた。私は老夫婦のことが心配だったが、子どもが家で待っているのに、北千住で別れるしかなかった。不安そうな老夫婦を見ると心苦しかった。

自分の携帯電話がつながらなかったのに、自国

の親も「何かあったのでは」と心配したようである。地震が起こった時は、とにかく誰かと連絡したかったが、家族に連絡したくても、公衆電話もないし、携帯電話もつながらなかった。

● ディスカッション ～外国人支援について考える～

① 第10ブロックにおけるメーリングリストの運用方法について

市川：

行政その他の団体合わせて20団体ほどが情報交換している。それぞれの団体の代表アドレスが登録されている。各団体が行事や情報の周知を行っている。



市川 裕之 氏

② 第10ブロックにおける地域への外国人の取り組み方について

市川：

いろいろな形で外国人にイベントに参加していただく努力をしている。ただのイベントではなく、そこに参加することによって、外国人にプラス・アルファがあると、人が集めやすい。

③ 外国人に対する防災訓練のアナウンス、対応はどのようにしているか？

遠井：

75の大使館に、防災訓練の日程表を持って回っている。大使館の中には、自国民がどのグループに入っているのか分かっていないところがある。訓練という言葉は使わなくても、もう少し緩やかな言葉を使うようにしている。昨年は外国人向け情報誌『メトロポリス』で特集号を組んでもらったところ参加者が増えた。言語については、現在区内7カ所で防災訓練を行っているが、どこのグループにも、英語、韓国語、中国語対応ができるようにしている。また、防災館や自衛隊で、実際の訓練を見てもらうという取組も行っている。



帰宅困難者の問題について、これまでは何となく、「帰っても良いや」と思っていた人が多かったが、実は帰らない方が安全である。帰宅者にとって道路は危険な状況になっているし、人が道路にあふれる

と、緊急車両の移動を妨げる。なので、港区の企業には帰らせないようにお願いしている。ホテルなどにも帰宅困難者を受け入れてくれないかお願いしているが、責任問題や受け入れ定員などの問題で受け入れを渋るところがある。港区は東京都と連携して、駅のシャッターを閉めないで受け入れてもらえないかとお願いしている。港区では、駅に防災無線や衛星携帯電話を設置しても良いとも思っているのもっと働きかけていきたい。

備蓄については、区が1日分、都が1日分、行っている。港区では大島からの避難民の受け入れを行った実績があるが、女性のためのヘアバンド、化粧品等の備蓄、トイレを男女別にする、強姦予防への取組などを行うべきであるということが分かってきた。

迅速な情報発信のためには、ツイッターやFacebook を利用していく。

江原：

ある避難所では、女性同士で会議をすると、女性特有の悩みがあることが分かり、明らかになってくる。こういうことも考慮していかなければ行けない。

古家崎：

上野、渋谷、池袋、新宿、北千住、八王子駅で市、区の方々や、JR と連携をとって行くための取組が行われている。都心の駅では、「シャッターが閉められた」ということも報道されたが、八王子駅では、トイレを貸す事実もあった。経団連、各鉄道会社も含め、これまでの見直しを行っているところである。地域防災計画なりに各社で盛り込んで、帰宅困難者対策を行っていききたい。

自分の命が危ないときは、火から逃げ、広い場所に行く必要がある。しかし、もし自分の命が危なくなく、建物も安全、安心であれば、そこに留まることが基本である。東京都は木造建築密集地帯を中心に、耐震化を進めている。行政だけでは100%命を守るところまで至っていない。自助、共助、公助の三つを合わせて命を守っていききたい。

江原：

「帰らない」といっても、親は子どものことを心配する。それぞれの地域で、自分の子どもが行っている学校ではどのような対策を行っているのか、どのような方針なのか確認しておくことが重要。家に帰ったら、「目黒巻」というのを検索してほしい。地震のときにどのような行動をとったかで、災害状況を的確にイメージする力を高めることができる。東京都国際交流委員会の『災害時の外国人支援マニュアル』を参照し、地震に備えてほしい。

震災当日、自動車やガソリンはなかったが、国際交流協会が携帯電話を数台持っており、これが外国人支援に役立った。多言語放送のコミュニティ FM でも、多言語で情報提供をしてほしい。日本人同士でも不信感がある状況で、日本人も外国人も一緒に地域の防犯パトロールを行う体制を整えておく。

④ 大震災後、地域のつながり、助け合いの変化を感じたか

メハラ：

震災後もあまり変わっていないのが現状。日本語を知らない人には何も情報が入らない。ボランティア活動で病院に行くが、英語のサポートが足りないという問題点がある。武蔵野市国際交流協会に話してみたら、何かやろうということになった。外国人のために武蔵野市の病院と一緒に、会議をすることになった。問診票はすべて日本語で、日本語ができない人は、診察も断られるという状況。問診票をいろいろな言語に翻訳し、病院に導入してもらえるか打診。もしもそれができなければ、外国語に訳した問診票を持っていく。



イーラン：

何かあったら、助けてくれるところは区役所だといつも思っている。区役所で通訳することもある。自分は中国で医師だった。中国語と日本語の通訳の技術（スキル）と、医者としての経験や知識がこれから医療通訳につながっていくと思っている。外国人を支援していきたい。

山川：

震災の後、ネパール人の友達から電話がかかってきて、多くの友達が、帰国するか、日本に留まるか、災害についての情報を聞いてきた。主人が日本人なので、日本に留まることにした。しかし、友達の中には国に帰った人たちも多かった。自分自身も夫が日本人でありながらも、はっきりした情報は持っていない状況で、誰かに情報提供することは難しかった。

日本語については、日本人と結婚して大変だった。発音がうまくいかない、なかなか話せない。足立区のボランティアの人に助けられて日本語の勉強をすることができて助かった。日本語の先生が親切で、遠方から町屋まで通っている人もいる。災害時は地域のボランティアや日本語学校に対しては、それほど頼りにしなかった。そこへ行っても、自分たちのことも不安な状況で、はっきり全部分かるということはないだろうと思った。

● まとめ

遠井：

いろいろ取組を行っているが、縦割りなので難しい。「東京都が〇〇してくれたら・・・」と「たら」が多い。これからは「〇〇ます」にしていく必要がある。

古家崎：

3.11以降状況が変わってきた。企業でも、防災に対する意識の高まりが見られる。ボランティアの方々

には、災害時一番活躍していただくことになると思うのでよろしくお願いしたい。

市川：

業務の上では外国人と話す機会はほとんどない。今日参加したことで外国人の考えが分かって非常に勉強になった。災害時に恐怖心に襲われると思うが、その対策として備えを行っていきたい。

メハラ：

外国人が自由に話せる場が少ない。今日は非常に有意義だった。これから外国人が日本に貢献していけると良いと思う。

イーラン：

東日本大震災の際も、普段も、行政にいつも助けられている。今回もこのような会を開いてくださり、本当に感謝している。

山川：

今日は外国人支援のためにこのような場を設けていただいたことを、本当に感謝している。これからももっといろいろな関心を持ちたいと考えている。

江原：

事前にできる自助と共助について、建築士の視点から、建物が倒れないように事前に対策しておくことが必要であると考えている。特に木造の場合は耐震補強や、どこに逃げるかを考えておくこと、二階で寝るなどの対策が必要。要援護者にならないようにすることが必要である。

NPO、NGO で活動しようとしても、自治体の方に受け皿がないと活動が難しい。NPO、NGO が震災発生前に自治体に働きかけ、受け皿を準備してもらうことが必要である。

分科会 4

- テーマ 情報提供としての「わかる日本語」：パート2
～「わかる日本語」の取組から見てくるもの～
- ねらい 「わかる日本語」による情報提供は、様々な団体で取組まれホームページなどで情報提供されていますが、ここでは、「わかる日本語」に取り組んでいる団体の皆様に、具体的な取組の状況を紹介していただきます。合わせて、取組に伴う苦労話や今後の参考になることなどもお聞きし、「わかる日本語」の着実な普及に役立てたいと思います。
- コーディネーター 寺嶋 誠一郎（中野区国際交流協会 事務局長）
- パネリスト 中山 眞理子（中野区国際交流協会専門員、亜細亜大学講師）
薄場 郁子（荒川区区民生活部文化交流推進課 都市交流係長）
小野 朋江（多文化共生ネットワークたま代表）
- 参加者数 37名

■分科会の構成■

● パネルディスカッション

「わかる日本語」作成に取り組んでいる3名のパネリストに、具体的な取組内容とともに、どんなところに苦労したのか等を話していただく。

● ミニワークショップ

わかる日本語の翻訳ワークショップを実施し、そこから今後の課題や方向性を来場者とともに考えていく。

● 質疑応答

● まとめ

● パネルディスカッション

「わかる日本語」の取組について

薄場 郁子さん（荒川区区民生活部文化交流推進課 都市交流係長）

① 荒川区の状況

◇ 区と国際交流協会の関係

- ・荒川区国際交流協会は任意団体で、事務員は区職員が兼職している。

- ・区の職員という立場で関係各所との調整ができると同時に、国際交流協会の事務局員として日本語教室講師等との調整ができるという恵まれた環境であった。

◇ 荒川区外国人登録の状況

- ・荒川区の総人口 205,893人（平成23年12月1日現在）

外国人 15,680人 外国人比率 7.6%

※外国人比率は、23区中第3位

外国人 15,680人中

第1位 中国 6,792人

第2位 韓国・朝鮮 6,735人

第3位 フィリピン 541人

第4位 ミャンマー 299人

※中国、韓国・朝鮮の人（漢字圏）が

外国人全体の86.26%

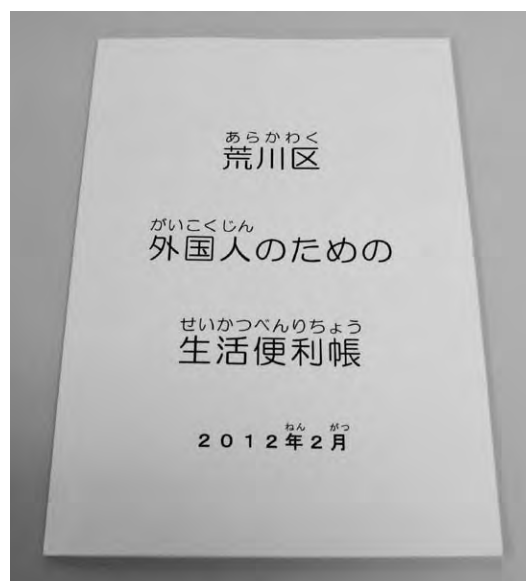


薄場 郁子 氏

- ・総人口が約20万人に対し、登録外国人の率は7.6%となっている。
- ・中国籍、韓国・朝鮮籍の方が総人口の約86.3%を占めており、漢字圏の方が多いという特徴があげられる。
- ・わかる日本語の作成には、対象設定が重要であり、荒川区では日本に来て間もない若い留学生がわかる内容のものを作ろうとした。

② 取組のきっかけ

- ・『外国人のための生活便利帳』の作成は、現場職員の声から上がった。
- ・既存の生活便利帳の文章では難しいので、福生市が作成したものをモデルとし、わかる日本語版の作成に取り組んだ。



生活便利帳

荒川区の「わかる日本語」による生活便利帳作成の取組について

1 区と国際交流協会の関係

荒川区区民生活部文化交流推進課＝荒川区国際交流協会

常勤職員 3人 (課長、係長、主任主事)

非常勤職員 3人 (中国語担当、ハングル担当、英語・ドイツ語担当)

荒川区国際交流協会は、区職員が兼職

2 荒川区の外国人登録状況 平成24年2月1日現在

外国人登録者総数 15,651人 外国人比率 7.6% 23区中3位

【主な内訳：国籍別】	①中国	6,827人	} 86.3%
	②韓国・朝鮮	6,685人	
	③フィリピン	534人	
	④ミャンマー	301人	
	⑤ネパール	279人	

【主な内訳：年齢別】	①20歳代	4,651人
	②30歳代	3,364人
	③40歳代	2,653人
	④50歳代	1,543人
	⑤10歳代	1,014人

荒川区版 わかる日本語
生活便利帳は漢字が多い
のが特徴です！

3 作成までの流れ

2010年12月～	掲載内容の選別・抽出 (第1校)
2011年 9月～	わかる日本語への変換、
10月	各所管に掲載内容の確認、国際交流協会理事会で経過報告 (第2校)
11月	わかる日本語への変換 (第3校)
12月	中野区国際交流協会 中山真理子先生にリライト依頼 (第4校)
2012年 1月	国際交流協会日本語教室講師によるリライト (第5校) 日本語教室受講生によるリライト (第6校) 【中国、韓国、英国、ナイジェリアの受講生】
	各所管に掲載内容の確認、国際交流協会理事の承認 (第7校)
2月	フォントの確認、挿絵の挿入、印刷、完成 庁内印刷機を利用したため、予算計上なし、経費0円



① 中野区の状況

✧ 世界レベルでの視点

- ・グローバル化が進むなかで、人々の移動が顕著になった。
- ・先進国では、それに対応すべく生活言語としての多言語化が進んだ。
- ・中野区では100カ国の住民、当協会日本語を学んでいるのは50カ国にものぼる。
- ・これらに対応する数の情報の多言語化には限界があり、言語保障となると膨大な経費、人材不足、少数言語であればあるほど費用対効果が薄れる。
- ・EU27カ国は、加盟国すべての母語に対する多言語化は無理との判断があり、以前の公用語に戻った。
- ・イギリス、アメリカ、スウェーデンが進んでいる。国が簡易な行政文書への変換についての法律をつくって制度化しているが、日本は遅れている。
- ・日本を含み各国の対応の語数としては2000語レベルが共通の基準となっている。



中山 眞理子 氏

② 取組のきっかけ

- ・中野区全体の人口は約30万人。外国人登録者数は約1万2千人で、4%である。
- ・1989年に国際交流協会は設立し、当初わかる日本語から多言語へという方式で取り組んできた。
- ・区報は英語と中国語、生活便利帳は英語、中国語、ハングルで書かれている。
- ・現実には上記の区民の方々への情報提供を主としているが、マジョリティは数だけではなく、全ての面でマジョリティであり、問題は全ての面で孤立してしまうマイノリティ言語の方々への支援だ。これをターゲットとして意識して取り組む必要があろう。

③ 成果物

わかる日本語での情報提供には、大きく分けて口頭と表記の2つがある。

口頭

- ・当協会では、わかる日本語での窓口対応、イベントの説明・司会を行っている。
- ・日本語ボランティアは、養成講座で徹底してわかる日本語による日本語指導ができるように訓練し、ボランティアになってからも年間80時間の勉強会でその技術を磨く。
- ・外国人のためのリレー専門家相談会では、わかる日本語の通訳を2年前から置く。一昨年は2件、昨年は母語を用意したにもかかわらず、9件のうち3件のわかる日本語による通訳の要望があった。将来は半分以上がわかる日本語となると予測する。

表記

- ・区総合防災訓練では、日本人ボランティア翻訳者、東京都総合防災訓練では、外国人ボランティア翻訳者がわかる日本語に訳した情報を平易なわかる多言語に翻訳する。
- ・既述の各種行事のチラシ、説明はわかる日本語で作成。
- ・住民に必要な不可欠な重大情報（例：SARS、新型インフルエンザ、放射能・原子炉情報）はわ

かる日本語およびわかる日本語から多言語化で提供。

- ・情報伝達におけるわかる日本語では、「中野方式」と呼び、協会設立時から一貫して行っている方法で、小学 1 年生でも、母国で教育を受けたことが無い人でも、理解できる平易な多言語化により情報伝達するのが原則。やはり日本語クラスの学習者の状況からの需要を反映している。
- ・「中野方式」では、他の自治体が行っているわかる日本語を 1 言語とし、他の一般的な多言語化と並列させるのとは異なり、まず、情報を精査し、わかる日本語にしてから、それを平易な多言語に翻訳するもので、逐語訳だと通常 2～3 時間かかる訳文を 20 分程度で完了できる。
- ・現在、区が発行している日本語・英語・中国語・韓国語の生活便利帳の在庫がかなりあるため、中野ではわかる日本語での翻訳はないが、今後、新たに発行する場合は、わかる日本語を使用するか、または土台となる日本語を平易にしたものを翻訳するよう提言する予定。

小野 朋江さん（多文化共生ネットワークたま代表）

① 小平市の状況

- ・外国人登録者数 4002 名、外国人比率 2.2%（H24.1.1 現在）
国籍 81 カ国（H23.1.1 時点）
国籍比率（朝鮮・韓国 45%、中国 29%、フィリピン 6%、
ブラジル 2%、米国 2%、タイ 1%、マレーシア 1%、英国 1%、その他 24%）
- ・在日韓国・朝鮮人、留学生・研究者が多い。

② 取組のきっかけ

- ・10 年前フィンランドに 1 年間滞在
- ・役所から来るフィンランド語の文書が難しすぎて解読できなかった。
- ・断水の通知が分からず、非常に困った。
- ・この経験がきっかけとなり、帰国後、外国人に日本語を教える仕事に就いた。
- ・仕事を通じて初級の日本語レベルでも工夫次第でかなりの情報を伝えられ、言語を覚えることで暮らしが楽しくなることを知った。
- ・行政からの文書も初級の日本語レベルで理解できるのではと思った。
- ・弘前大学、福生市の事例を知り、小平市広報課に伺ったら、作成の予定はないと言われ、自分たちでつくってみた。
- ・英、中、ハングルの多言語版をやさしい日本語にしようとしたところ、とても難しい作業であることがわかった。

③ 成果物

- ・小平市では、市役所・国際交流協会ともに「わかる日本語」での情報提供は行っていない。私は、昨年福生市の事例を知り、多文化共生ネットワークたまで取り組めないかと考え、「わかる日本語」による簡単な生活ガイドを作った。また、震災直後は、多文化たまのスタッフが twitter や facebook で「わかる日本語」による情報の書き込みを行った。ただこれも、一方的な情報提供なので、外国人にどれだけ活用してもらったかは不明。



小野 朋江 氏

- ・生活ガイド

多文化共生ネットワークたまの外国人ママスタッフにもチェックしてもらった。

印刷・配布は、小平市国際交流協会が協力してくれる予定。

- ・「よる こどもが びょうきに なったら」

外国人ママが、子育てをする中で特に知りたい情報を、わかる日本語で提供していこう、ということになった。この時間帯ならここへ行く、この電話番号へかける、というのがわかる内容のチラシです。健康センターにも置いていただくようお願いしている。

- ・避難訓練の広報チラシ

北多摩地区の市と国際交流団体によるブロック会議があり、多文化たまもメンバーになっている。このブロックで、昨年の東京都防災訓練（小金井公園）に参加した。その際、外国人向け広報チラシのわかる日本語版を、多文化たまが担当した。

- ・多文化なママの交流会「たぶんかママカフェ」

毎月開催。ヨガやお茶会で、子育ての悩みや楽しさを共有している。

このチラシも、「わかる日本語」で書いている。

苦勞したこと、取組から見えてくるもの

小野

- ・「わかる日本語」での作成には時間がかかり、仕事や育児等の合間にボランティアで行うには難しい。
- ・行政との連携が必要。
- ・小平市が外国人のための生活ガイドを作らない理由について。小平市の在住外国人率は2%で、行政サービスの立場から見ると、少数になってしまう。また、在日韓国・朝鮮籍の方が多いこと、大学の国際キャンパスがあるため、日本語を理解していない情報弱者はあまり多くはないという見解だった。



寺嶋 誠一郎 氏

中山

- ・国立国語研究所により、「わかる日本語」版のソフト開発に5億円あれば5年でできる、という見解がある。
- ・一橋大学の庵先生が中心になって「わかる日本語」版作成の際の共通の基準作りに取り組んでいらっしゃる。具体的には、6000語レベルの行政用語を2000語レベルのやさしい日本語に直していくことになろうと伺っている。
- ・『基準』は必要で、特にこれから取りかかろうとする方々にとっては非常に大切であろう。皆その基準作りを待ち望んでいる。
- ・しかし、自己の経験では基準は、情報の目的、内容、対象によって違う。1つのレベルでは対応できないのではないか。

- ・経験則であるが、最低2レベルの基準が必要ではないかと思う。
- ・地域性も考慮しなければならない。
- ・スウェーデンの事例を紹介すると、総人口900万人のうち、100万人がネイティブではない。国において、簡易スウェーデン語が義務化されているおり、外国人に対してではなく、全国民向けに実施している。

薄場

① 完成まで

- ・具体的な取組についてですが、この生活便利帳は、2日前にようやく完成した。完成にあたっては、中山真理子先生をはじめ、関係者の協力のおかげである。
- ・最初に、従来の区民向けの生活便利帳をコピーし、日本に来て間もない外国人に対して必要な情報はどれか、何を掲載するかを担当者5名で考えた。
- ・次に、必要であると思ったものだけをセレクトして、ワードで並べ、どの情報をどの順番で掲載するか考えた。3月に地震が発生し、被災地支援に行かなければならなくなったことや、他業務があったため、一時作業がストップしたが、9月から掲載したい情報を「わかる日本語」に変換する作業に取り掛かった。
- ・10月に掲載したい各部署に掲載していいか確認を取り、荒川区国際交流協会理事会で経過報告をしたところ、理事の中に不動産業を営む方がいて、部屋を借りるときのマナーも入れて欲しいというリクエストがあった。
- ・中山真理子先生のアドバイスをもとにリライトし、さらに日本語教室の3人の講師にリライトしていただいた。当初、119番の掛け方で、「無料です」と表記していたが、「0円です」と数字にした方がわかりやすいとか、外国人は数字に敏感なので、内線番号は所属の前に書いた方がいいなど、ありがたいアドバイスをたくさんいただいた。
- ・先生方にリライトしていただいたものを、日本語教室の受講生中国人2名、韓国人2名、イギリス人1名、ナイジェリア人1名に読んでいただき、受講生の方にも納得がいくものにしてから、再度、関係部署に外国人がわかる日本語になったものの掲載確認をお願いした。
- ・「わかる日本語」として各部署に確認をお願いしたところ、その部署で修正案を分かち書きにしたり、「わかる日本語」にして戻してきてくれた。最後に絵を描くのが得意な隣の係の係長が挿絵を書いてくださり、庁内印刷機で印刷し、完成した。

② 苦労したこと

- ・一番悩んだのは、「わかる日本語」とは何かということ。日本に来て間もない外国人にわかる日本語とは何かがわからなかった。
- ・日本語教室に通っている受講生が読んでわかる内容にしたかったが、語学力は個人差があり、「わかる日本語」辞典があるわけではないので、どんな日本語がわかって、どんな日本語がわからないのかわからなかった。
- ・漢字圏の方が多いというのが荒川区の特徴だと先述したが、中国語圏の方は、漢字が理解できるため、ひらがなが多い日本語だと逆にわかりづらいという意見もあった。
- ・今回掲載する内容は区役所の仕事の範囲にするのか、それとも生活全般にすればいいのか、色々

と意見が分かれた。

- ・わかる日本語には決まりがないため、章ごとに分けて、複数の職員が担当すると表現や形式に違いが出てしまうため、一人で担当せざるを得ない状況があった。

● ワークショップ

○2題を翻訳する

東京都主催外国人のための防災訓練の7題から簡単な文章を2題抽出。

※P.54、55 資料参照

○わかる日本語に翻訳する場合の2つのポイント

- ・外国人にとってわかりやすいものになっているか
- ・何を教えたいのか、伝えたいのか、クリアな情報は何か

○課題文を読んだ参加者からのご意見

～第1問～

- ・どこに避難していいかわからない。
- ・指示と勧告のちがいをどう説明していいかわからない。
- ・一番伝えたいことが最初に書かれていない。
- ・漢語が多くてわかりづらい。

～第2問～

- ・「各種情報」というものがわからない。
- ・全般的に難しい言語が多い。
- ・まわりくどい表現が多い。
- ・「思われる」「考えられる」など分かりづらい表現がある。

○パネリストからのコメント

中山

- ・外国人は、地名が読めない方が多い。外国人を含んでいることを想定していない。
- ・わかる日本語翻訳作成には、いろいろな視点で捉えないといけない。
- ・自分の活動の場だけでなく、いろいろなステージで活動している人の考えを聞くことも大事。

小野

- ・時間がかかる。
- ・少ない人数で無報酬でやるのは難しい。
- ・勉強会を実施することが小平市国際交流協会の協力で決まった。
- ・行政との連携の新たな一歩を踏み出せた。



《国際化市民フォーラム in TOKYO 第4分科会資料》

ミニワークショップ

次の内容の文章を「わかる日本語」に直してみましょう。

課題文（１）

品川区豊町で発生した大規模火災は、折からの強風に乗り、同区戸越、中延にまで延焼地域が広がっており、いまだ鎮火の目処が立っておりません。

近隣地域には避難指示が、区内一帯には避難勧告が出されており、近づくことはできません。

さらに延焼が広域化する可能性もあります。大田区、目黒区のみなさんはいつでも避難できるよう準備をしてください。

課題文（２）

週明けから関東地方は暴風雨になると予想され、総降水量が1000ミリを超える大雨となる恐れもあります。

先日の地震で損傷を受けた建物が、大雨や暴風によって倒壊することも危惧されています。

河川の氾濫や洪水が起こる危険性もあり、区から避難勧告や避難指示がでる場合もありますので、各種情報に十分注意をはらいましょう。

(課題文 1) 解答例

しながわくゆたかちよう おお かじ お つよ かぜ
品川区 豊 町 で 大きい 火事が 起きました。強い 風で
とごし なかのぶ かじ ひ き ちか ひと
戸越、中延も 火事です。まだ、火は 消えません。近くの 人
は に くだ かじ ちか い ことは できませ
ん。品川区に 入らない 方が いいです。
もっと かじ おお おおたく めぐろく
もっと 火事が 大きく なるかもしれません。大田区、目黒区の
ひと に じゅんび
人は 逃げる 準備を して ください。

(課題文 2) 解答例

らいしゅう はじ かんとうちほう あめ かぜ つよ
来週の 初めから 関東地方では 雨や 風が とても 強く
なるでしょう。あめ いじょう ふ
雨が 1000 ミリ以上 降る かもしれません。
まえ じしん すこ わる いえ あめ かぜ たお
前の 地震で 少し 悪く なった 家が 雨や 風で 倒れる
かもしれません。
かわ みず みち いえ はい くやくしよ に
川の 水が 道や 家に 入る かもしれません。区役所が「逃
げた ほう ほうがいいです」とか、「逃げなさい」と いう かもしれま
せん。いろいろ し き
色々な お知らせを よく 聞いて ください。

● 質疑応答

質問① 中野区のわかる日本語の必要性、目指すゴールは何なのでしょう？

回答① 区や都レベルだけでなく、日本全体のなかで、広く外国人との共生をしていくために、わかる日本語の問題が追求されている。国はわかる日本語のスタンダード化を考えているが、それを広める拠点は日本語ボランティアのグループだと思う。その目指すものと一致するか。中野は視点を低く持ち、最後の人も情報からもれないよう、生活権の保障実現が多文化時代のゴールと考える。

質問② このフォーラムに来日1～5年の主婦を参加させたらどうか？

回答② 去年は3人参加してもらった。

このことをぜひ持ち帰って役立ててほしい。

荒川区では行政、国際交流協会、海外友好都市と連携して作成した事例がある。

リソースを出す側にフィードバックし、情報の受け手となる日本語教室受講生にもフィードバックしている。このような事例を参考にしてほしい。

質問③ ネイティブチェックはあった方がいい。

災害時の支援システムをつくり、東京都等が主催して研修をたくさん実施してほしい。

国籍を問わないで。

回答③ そのような考えがまさに多文化共生の考えである。

このような場に行政職員が参加してくれたことが嬉しいこと。

● まとめ

寺嶋

○今後の課題は、行政を含めた意識改革、共通の基準づくり、作成にかかる人材の育成の3点となってくるだろう。

薄場

○『外国人のための生活便利帳』は外国人登録係、日本語教室受講生に配布を予定している。

○今回は平成24年7月の新しい管理制度の導入を見据え、暫定版として作成・発行した。

○毎年変わる制度に対応していくこと、日本語教室受講生、日本語教師、ボランティア、国際交流協会理事の思いを聞いて、まとめていくことが課題。

小野

○ブラッシュアップしていきたい。行政から伝えていきたい情報があるはず。

○外国人が本当に知りたい情報は何なのかということを大事にしていきたい。

○どこにどう聞いていいのかわからないことはまだまだいっぱいある。

○「わかる日本語」をツールとして、外国人にとって必要な情報提供を草の根でできたらいいなと思っている。

中山

○多言語ではなく「わかる日本語」にシフトしていくのではないかと予感している。

○リレー相談会では「わかる日本語」の通訳のニーズがあった。

○定住、永住、帰化、国際結婚で暮らす方が増えているなかで、多言語だけの情報提供では対応できないのではないかと。

○そこで、「わかる日本語 + わかる母語」の対応が必要になってくる。

○某区では、わかる日本語による窓口対応する職員研修計画がある。

○印刷物だけでなく接遇での対応も必要である。

○一人一人がわかる日本語活動に参加していただき、進んでいきたい。



たぶん かきょうせい
多文化共生ネットワークたま

<http://tabunka-tama.world.coocan.jp>

がいこくじん げんき にほんじん げんき
外国人ママも元気。日本人ママも元気。

ちいき がいこくじん たぶんか
地域の外国人といっしょに、多文化たまは、こんなことを やっています。

し
知りたい

★やさしいにほんごで 書いた
「ママと 子どもの ための パンフレット」
→ ホームページにも UPします。
★外国人ママの ための
「日本料理教室」
→ おしえてくれる 日本人ママ 募集！

おし
教えたい

★じぶんの 国の 家庭料理を おしえる
「ワールドキッチン」
→ 水餃子、韓国のりまき、生春巻 など
★じぶんの 国の ことば、
手作りの もの… など
→ 教えたい 外国人ママ 募集！

ともだち
友達になりたい

★多文化ママカフェ・多文化ママヨガ
→ 毎月1かい。小平市中央公民館で
★そのた イベント
★外国人留学生と小学校の交流授業



にほん こそだ がいこくじん おも
日本で 子育てを がんばっている 外国人ママを おうえん したいと 思っています。

「多文化たま」からの お知らせが ほしい 人、
多文化ママカフェなどの イベントに 来たい 人、
外国人ママを 紹介してくれる 人、

「多文化たま」の スタッフとして いっしょに 活動したい 人、
連絡まっています！

E-mail : tabunka-tama@mbr.nifty.com Tel : 090-1798-2144 (小野)

「日本人も外国人も心豊かに暮らせるまちづくり」

さまざまな国籍の人々が、地域の中でともに暮らし、働き、遊ぶ。

お互いの違いを知り、認め、受け入れる。そしてその出会いが、自分の財産になる。

多文化・多民族・多言語の社会は、それだけ豊かな社会であるということ。

小さな島国である日本にしながら、世界に出会えるということです。

グローバル化が進む今の時代、外国籍の人も日本国籍の人も、同じ地域の生活者です。

生産者であり、労働者であり、消費者です。

様々な文化や言語を持つ人々が手を組んだら、地域を元気にする仕事ができるはず。

これまで、行政や各地の国際交流団体が担ってきた、「国際交流」「外国人支援」というキーワードに、私たちは「多文化・多民族の協働(コラボレーション)」というキーワードを付け加えたいと思います。

あなたの心の中に、そしてわたしの心の中に、ありませんか？

外国人への偏見、差別、恐れ、とまどい。そして…無知、無関心。

日本に住む、外国にルーツを持つ人の中には、本名や国籍を伏せて暮らしている人もたくさんいます。

伏せてはいないけれど、あまり言いたくない、という人もいます。

私たちは、その事実から逃げたくありません。

私たちは、東京多摩エリアに住む、多国籍の市民グループです。

2011 年1月に「多文化共生ネットワークたま」を設立しました。

- ①外国人と日本人が、地域でともに活躍できる場を作ります。
- ②外国人を情報弱者にしない社会をめざします。
- ③外国人の人権を守ります。
- ④とくに子育て中の外国人ママをサポートします。
- ⑤上記のミッションを非営利事業として行います。

「多文化共生ネットワークたま」

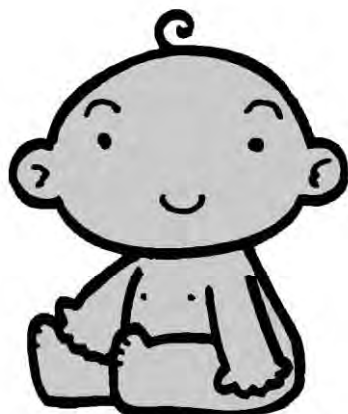
代表 小野朋江

スタッフ一同



イラスト提供：ふわふわ。り

子どもを そだてる／教育する



保育園・幼稚園の 質問は こちらへ
小平市役所 保育課

☎ : 042(346)9601

時間: 月曜日から 金曜日 8:30から 17:00

休み: 土曜日、日曜日、祝日 <国が きめた 休み>、年末年始 <一年の はじめと
お
終わり>

保育園 <6さいまで(小学校に はいる までの)の 子どもを 世話して くれる ところ>

・仕事(自分の 家での 仕事では ありません)や、病気、けがで 子どもの 世話を する
ことが できない とき、子どもを 世話して くれる ところです。

・もうこみは、市役所の 保育園に きいて ください。

* 市立保育園・・・10園

* 私立保育園・・・8園

保育園の 名前		ばしよ	☎	何人まで	とし 年
市 立	上宿	おがわちよう 小川町1-308	042(345)1163	109人	57日から 5さい
	小川	おがわちよう 小川町1-983	042(343)3621	120	1さいから 5さい
	小川西	おがわにし 小川西町5-13-22	042(341)0076	100	1さいから 5さい
	上水南	しょうすいなん 上水南町3-8-2	042(323)1036	106	57日から 5さい
	喜平	きへい 喜平町3-2-36	042(321)6949	120	1さいから 5さい
	津田	つだ 津田町3-31-7	042(342)1764	120	1さいから 5さい
	仲町	なかもち 仲町7	042(343)8262	130	57日から 5さい
	鈴木	すずき 鈴木町2-219	042(461)3066	120	1さいから 5さい
	大沼	おおぬま 大沼町2-399	042(341)0726	132	57日から 5さい
	花小金井	はなごがねい 花小金井5-41-3	042(462)5775	100	1さいから 5さい

学童クラブ <学校が おわった あとで 小学生を 世話して くれる ところ>

・仕事や 病気で 子どもの 世話を することが できない とき、子どもを 世話して くれる ところ です。 小学校の じゅぎょうが おわった あとで、子どもを 世話して くれます。

・小平市には ぜんぶの 小学校に 学童クラブが あります。

・はいる ことが できる 人…1年生から 3年生までの 子ども

* 障がい児 <体が じゆうに うごかない 子ども>は、1年生から 6年生まで。



小学校・中学校の 質問は こちらへ

小平市役所 学務課 ☎ : 042(346)9570

時間: 月曜日から 金曜日 8:30から 17:00

休み: 土曜日、日曜日、祝日 <国が きめた 休み>、年末年始 <一年の はじめと おわり>



日本の 教育

・小学校 6年間(6さいから) → 中学校 3年間 → 高校 3年間 → 大学 4年間

・義務教育 <ぜんぶの 子どもが いく 学校>…小学校と 中学校

* 0円です…授業料<勉強する ために 学校に はらう お金>、教科書<学校 の 勉強に つかう 本> * 私立学校は 0円では ありません。

* お金を はらいます…学用品 <えんぴつ、ノート など>、給食 <学校で たべる 昼ごはん>、遠足 <学校の 外へ でかける 勉強>



多文化ママカフェ プロデュース

たぶんか

多文化ママヨガ



いろいろな くにの ママが あつまります。おなかに あかちゃんがある
ひとも きて ください。いっしょに ヨガ(YOGA)を しましょう。
にほんごが わからない ママも だいじょうぶです。
こどもと いっしょ でも OK。ママ ひとり でも OK。
にほんじんママも ぜひ きてください。



いつ?

11月19日(土)

14:00~16:00

どこで?

小平市 中央公民館

和室「けやき」

いくら?

500円

★せんせい MAKI さん

★うごきやすい ふくで きてください。

★バスタオルを もってきて ください。



もう
申し込み



Mail: tabunka-tama@mbr.nifty.com

TEL: 090-1798-2144 (おの)

なまえ、でんわばんごう(Tel)、国、こどもの 年を おしえて ください。
つぎの たぶんかママヨガは 12がつ17にち(どようび)14:00~ です。

がいこくじんママもげんき! にほんじんママもげんき!

たぶんかきようせい

多文化共生ネットワークたま

(私たちは 東京多摩地域に住む 日本人と 外国人の 市民グループ です)

<http://tabunka-tama.world.coocan.jp>

twitter ID: @tabunkaTAMA / mixi と facebook にも ページが あります

Multicultural
Network

TAMA



こだいら

よる こどもが びょうきに なったら

1. 19:30~22:15

こだいらし けんこう センター

小平市 健康 センター

Tel : 042-346-3706

(こだいらし がくえんひがしちょう 1-19-12)

2. 22:15~09:00

しょうわ びょういん

昭和 病院

Tel : 042-461-0052 (でんわ して ください)

(こだいらし てんじんちょう 2-450)

しょうに そうごう いりょう センター

小児 総合 医療 センター

Tel : 042-300-5111 (でんわ して ください)

(ふちゅうし むさしだい 2-8-29)

3. ちかい びょういんを さがす

ひまわり Tel : 03-5272-0303 (まいにち 24じかん) にほんご

Tel : 03-5285-8181 (まいにち 9:00~20:00)

English/Chinese/Korean/Thai/Spanish

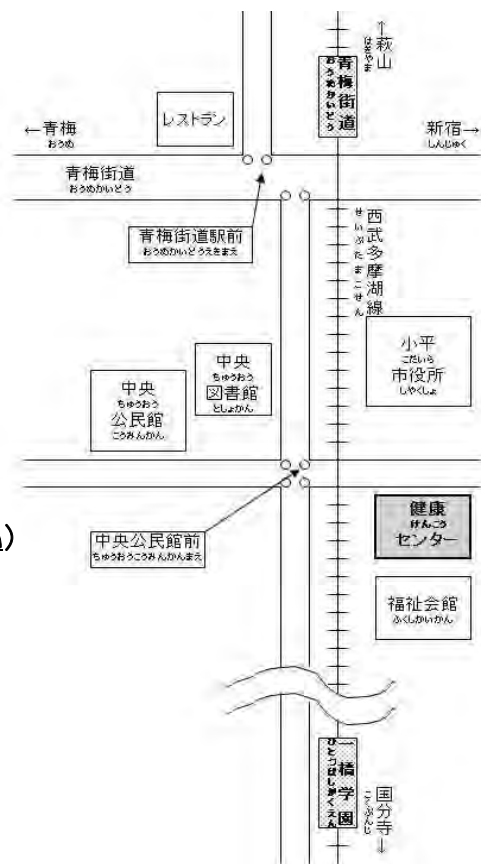
<http://www.himawari.metro.tokyo.jp/> (にほんご、English)

4. にちようび・しゅくじつの ひる 9:00~17:00

こだいらし けんこう センター

小平市 健康 センター Tel : 042-346-3706

(こだいらし がくえんひがしちょう 1-19-12)



もちもの : 保険証 (ほけんしょう)
医療証 (いりょうしょう)

ねん がつ にち とうようび
2011年10月29日(土曜日)

じかん
時間: 9:00~12:00

(12:00~ 公園の中でランチパーティーもあるよ!!)



みんなで 行こう!!

じしん 地震から くにれん にげる訓練



さんか 参加 無料 ゑん0!!



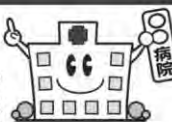
しょうぼう
消防



けいさつ
警察



びやういん
病院



ひと
の人と



じしん 地震から くにれん にげる訓練 を します。

ランチパーティー

12:00~ もちもの: お弁当・のみもの・レジャーシート

もうしこみほうほう 申込方法: 10月28日(金曜日)までに 電話☎してください。

もうしこみさき 申込先: 小平市地域文化課文化交流担当 (9:00-17:00/月-金) ☎042-346-9833
小平市国際交流協会 (9:00-17:00/月・水-土) ☎042-342-4488
多文化共生ネットワークたま (9:00-17:00/月-金) ☎090-1798-2144

ばしよ 場所: 都立小金井公園

こうつう 交通: JR 中央線 武蔵小金井駅・東小金井駅からバス

せいぶしんじゅくせん 西武新宿線 花小金井駅西武バス

ちゆうしゃじょう 駐車場 (有料)あります。

ばしよ 場所がわからない人は、花小金井駅からいっしょに行きましょう。申し込むときに、言ってください。

ちず
地図



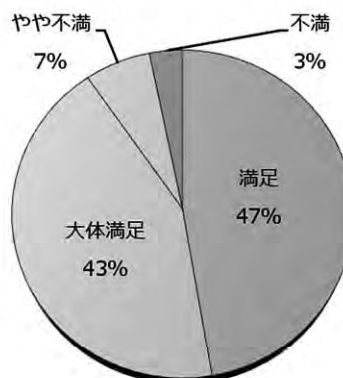
●外国の人への通訳や運営のボランティアも募集中
(外国の人でも日本人もOK!)

Ⅲ 国際化市民フォーラム in TOKYO アンケート結果

◎アンケート回収結果 93 名（参加者延 169 名） 回収率：55%

《満足度》

満 足 （44 名）
大体満足 （40 名）
やや不満 （ 6 名）
不 満 （ 3 名）



《主な感想》

第1分科会

- 現場の本音も少し聞けた気がする。
- 大学の学生団体に入って、石巻に行ってボランティアを一度行い、その後東京でできることを模索し続けている。昨日も大学で話し合いを行った。今日は、今後開かれる市の社協との意見交換会や、大学生としての活動のためにヒントをいただいた。また、どうすればよいのだろうと迷う気持ちは当然だし、そこを大切にすることは間違っていないのだなという思いも抱いた。学生は身軽。動ける、時間があるのが特徴。それを活かした活動を今後も続けて行こうと思った。
- 様々な立場の方のお話が聞けた。地震について改めて見直すよい機会となった。
- 現場の生の声を生き生きとした体験を基に話され、パネリストの方々の奮闘ぶりも伝わり、とても有意義かつ考えさせられるものだった。
- 3.11 を忘れかけている東京、そして自分。TV 番組のマスコミは、末世とも思われる。復興、地域づくり、ゼロからのスタート。コミュニティーの原点をみた思い。
- 現地での生の姿がわかった。テレビ報道のあり方についても考えさせられた。
- 現場の生の声を聞くことができ、大変有意義だった。
- 防災や緊急時の対応などに関心があったが、災害、復旧後の「復興」ということに目を向け、災害の全体像を考える機会になった。
- 支援活動を最前線で担っている方々の具体的な実践例を聞き、大変参考になった。また同時に本当に当事者の立場に立った支援の難しさも痛感した。
- 遠野ネットワークの齋藤さんの考え方が、これからの社会、日本の 10 年後のあり方のヒントになった。
- 現場の意見が聞けた。
- 実際に被災地の支援をされているパネリストの方々の貴重なお話を聞くことができ、とても勉強になった。今後「自分にしかできない支援」を見つけ、活動したいと思った。
- 4 団体それぞれ異なった活動内容で、お話を聞いていて非常に興味深かった。被災地の内と外、仮設と在宅の間、活動団体間で未だあるギャップを埋めていくような試みが求められるのかなと思った。
- それぞれ違う地域で特徴あるパネリストの方からお話を聞けたこと。
- 現地で支援をされている NPO の実践的なお話が伺えたことはとても勉強になった。

- 講演者のお話は、震災直後、その後の支援、復興支援など時間の経過とともに目的が変化してゆくのに対応されているのだと思うが、短い時間で上手にわかりやすく説明されていたと感じた。
- パネリストそれぞれの活動の内容が、よく理解できた。活動は各団体の理念のもとに、活動に関わる個人が大変重要なことがわかった。
- 活動内容を知ることができ、学びになった。寄り添う、忘れない、行動にいかに関係するかと思う。
- 各地での状況がわかった。今自分にできることを思案中。
- それぞれの団体の活動内容、皆さんの熱い思いを聞いて勉強になった。
- 地域固有の課題を共有する方策について、具体的に考えるきっかけとなった。
- パネリストからたくさん話が聞けた。それぞれの立ち位置が違うため、様々な角度から意見を聞いたことが有意義だった。

第2分科会

- 他都市の取組や問題点がわかった。
- やさしい日本語の現状がわかりやすく問題点（課題）もわかった。
- わかる日本語についての全国の取組、作成する時の具体的な基準の例、普及のための課題について短時間のうちにまとめてくださった。
- 大田区在住の通訳案内士で区内の外国籍住民に対する情報発信の現状がヴィヴィッドに理解できた。残念だったのは、やはり庵先生がご欠席されたこと。
- 地域、生活に深くかかわりがあり、有意義なテーマ・内容だった。
- 同じことが検討されている。ボランティアとしても大いに参考になる。
- パネリストの先生のご欠席、とても残念だった。配布資料が充実していて、日本語ボランティアの活動に参考になる。
- やさしい日本語の具体的基準をもう少し明確にしてほしい。
- 調査結果の概要がわかりやすかった。「歩み寄る」お話、興味深かった。
- 庵先生の発表も聞きたかった。
- 庵先生のお話を聞くことができず、当初のイメージと変わってしまい、残念だった。
- 多言語による情報の発信に重点をおいてきたが、「やさしい日本語」による情報の提供について、その長所を理解することができた。
- 病気により欠席されたパネリストがいらした。
- 「わかる日本語」の全体像と現場の声がどちらも聞けて、参考になった。以下の2点についてもっとお話を伺いたかった。
 - ① 現場で実際にリライトやコミュニケーションを行っている人の声
 - ② 「わかる日本語」での情報を受取る側の人の声、実際どの程度「わかった」のか？
- 庵先生のお話をお聞きできなくて残念だった。「やさしい日本語」の理解が深まった。わかる日本語を学びたいと思う。
- 庵先生がご欠席だったので、一番聞きたかった「やさしい日本語」の基礎知識と問題点がわからなかった。（帰って資料を読むしかないわけですが…）行政サイドの報告は少しがっかりした。まだ各部署の縄張り意識というか、お役所意識は世間からまだまだかけ離れているように思う。もう少し、現場の方に意識改革を促す旗振りをしてほしい。だいたい行政の印刷物自体、外来語の多用、漢語の多用で、一般の人（特に高齢者）にも読みにくい、わかりにくいのが現実ではないか。

- 実態調査結果については満足。それを踏まえてどうわかりやすい日本語を拡げていくか、もっと建設的な話をしてもらえればよかった。
- 庵先生、欠席残念でした。（仕方がない）やさしい日本語の取組は知識がなかったのでなかなか興味深かった。

第3分科会

- これからしなければならないことについて、示唆をいただいた。地域での取組の資料があるともっと良かった。
- 行政側の防災対策と外国人の方の体験が聞けて、とても参考になった。
- 外国人にとっては、地震の時、日本語がわからないから大変な程度がわかった。
- 港区および小平市国際交流協会での具体的な外国人に対する防災訓練広報が聞いたことはよかった。
- 行政の方々、外国人のパネリストの方々、双方ともとても興味深いお話をしていただきありがとうございます。
- 3.11を経験された外国人の方々の声を聞けると思い参加した。
- 3.11以降、行政に対して良い印象を持ってないことも多かったので、都や市区が防災などに向けて意欲的に取り組んでいる様子を知ることができ、安心した。ただ、せっかくの外国人パネリストの方の話を受けて、行政がその声を具体的にどう形にするのかという話をもっと聞きたかった。
- 行政の方と外国人の方の間で議論があったら、もっとおもしろかった。
- 3.11から時間が経ち、防災意識も薄れており、「危ない」と感じていた。電光掲示板、駅の有効利用他いいアイデアをどんどん取り入れてほしい。多人数での口の伝言には限界、デマなどが多い。それを防ぐためにもお願いしたい。日本人も不安、まず日本人が安心できれば、外国の方々も安心できるはず。
- 復興とは元に戻すのではない路線変更だ。自分がどうしたいかの vision を持つ。多様な人の立場、相手をさぐりながらモノ言えない状況という言葉をよく考えてみたいと思う。
- 外国人の方の被災時の体験談。
- スライドが遠く、少し見にくかった。ただ、内容には満足。
- 大変よくわかった。外国人に対して意識が深まることを期待する。
- 東京都の場合、広範囲で短時間での発表は全ては当然無理だと思うが、3.11～今まで 具体的にどういった対策・支援をして 今後の課題として何が見えてきているのかなど、具体的な話を聞けず、せっかくの機会なのに残念だった。何か1つ2つでも例をだしてもらいたかった。一般市民が膨大な資料を読み解くのは大変。わかりやすいPR 資料を。
- 外国人の方たちの災害時の様子がわかった。都内の防災の取組が少しわかった。
- 外国人の視点に立った防災計画についてあまり具体的な提案がなかったため。都や区の様々な対策、取組についてはとても参考になった。
- 発表された方の内容、簡単なものでもいいので資料が欲しかった。
- 防災教育は別の機会にして、本日のテーマについて時間を使っていたきたかった。本当に予想外の時間だった。

第4分科会

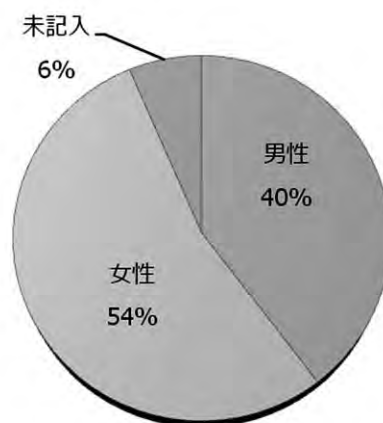
- わかる日本語のワークショップは良かった。

- 具体的な経験談などが聞けてよかった。
- ワークショップの内容が勉強になった。あいまいな表現が当たり前の社会の中で教育を受けた私たちにとっても、公的文書はわかりにくいと改めて感じた。
- 「やさしい日本語」とか「わかる日本語」に多くの方々が関わり合いを持ち、推進されてこられたことを初めて知った。江東区の国際交流窓口もフォーラムの内容を知らせると共に各交流団体に周知する。
- 防災訓練で、翻訳訓練にだされた例題が興味深かった。
- ワークショップがおもしろかった。翻訳は難しい。
- 日本語をわかりやすくすることに興味があったので。
- 昨年も参加させていただきまして、「わかる日本語」についての研究・普及等に踏み込まれて、先々に明るい灯が見えたように思っていた。しかし、今回も参加し、驚き驚きだった。地道な研究、進めるためのアンケートをとり、まとめ、そして荒川区の便利帳をみるまでに刷り、関係皆さまの努力に頭が下がり、私も身近にできることをやっていきたい。
- 大変参考になった。興味深く、拝聴した。今後に大いに役立てたいと思う。
- わかる日本語の必要性がよくわかった。
- ミニワークショップがあり、おもしろかった。課題文（2）の1000ミリの恐ろしさが、分かっている人と分かていない人とは、伝え方に差が出るように感じ、ただの翻訳にプラスして知識として必要な情報もあるかもしれないと思った。
- 今後の活動に活かせる。
- 大変有意義な内容だった。日本語教室で教えるべき内容にも発展すると思う。
- 日本語を簡単に理解される方法、もう少しいろいろな例をだしてほしい。
- これから日本語ボランティアをめざしている。わかる日本語の取組状況を知りたいと思って参加した。苦労されながらわかる日本語教育に取り組んでいることを聞いて、自分もお役に立てればと思った。
- 行政の例、外国での経験、日本語ワークショップなどいろいろなお話が聞けて参考になった。
- 様々な意見を聞いて良かったと思う。庵先生の話の聞けなかったのが残念。
- 午前中の部、「わかる日本語パート1」を欠席してしまったので（自分の責任だが）未消化部分は少しあった。楽しく有意義な勉強をさせていただいた。
- 地道に活動が続けてこられた方々の、それぞれ違う立場からの（本音も交えた）現実の状況の説明、ご意見が伺えて興味深かった。単に聞くだけでなく、ミニワークショップという形で参加する（つまり「わかる日本語」を実感として捉える、自分の中でちゃんと考えてみる）のも良かったと思う。
- 初めて参加して勉強になった。ただ、なんとなく今一歩という感じは否めない。
- ミニワークショップはよい刺激になる。
- 課題文（特に（1））の現実性に疑問を持った。読みというよりは、地域放送の際「わかる日本語」ということかもしれない。まだまだ始まったばかりなので、これからの分野だと実感した。
- 発表される方は時間の関係と思われるが、早口でまくし立てるような感じだった。
- 生活便利帳の目次だけには訳があるとよいと思った。外国語はすんなり目に入ってこない。課題文の出所、位置づけがはっきりしていないのでやりにくかった。

参加者について

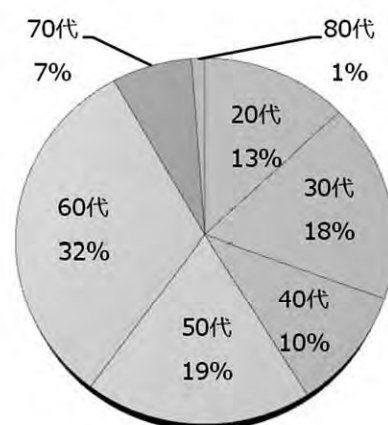
《性別》

男性	(37 名)
女性	(50 名)
未記入	(6 名)



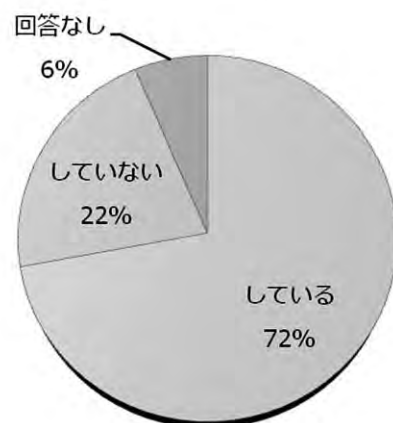
《年代別》

20 代	(11 名)
30 代	(15 名)
40 代	(9 名)
50 代	(16 名)
60 代	(27 名)
70 代	(6 名)
80 代	(1 名)



《国際交流・協力に関わる活動をしているか》

している	(67 名)
していない	(20 名)
回答なし	(6 名)

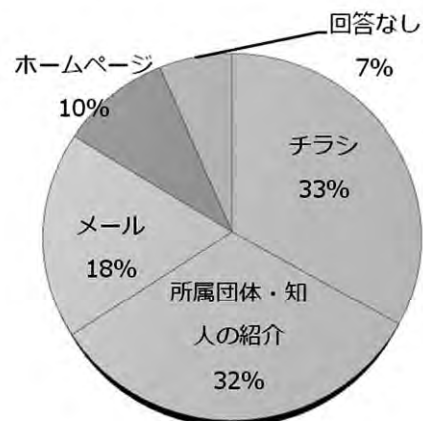


《団体名》

- ・区・市役所
- ・区・市国際交流協会
- ・語学ボランティア
- ・NPO 法人 など

《主な活動内容》

- ・日本語ボランティア
- ・日本語教育・学習支援
- ・国際交流事業
- ・相談事業
- ・広報活動 など



《今回のフォーラムを何で知ったか》

チラシ	(31 名)
所属団体・知人等	(30 名)
メール	(17 名)
ホームページ	(9 名)
回答なし	(6 名)

平成 24 年 3 月発行

国際化市民フォーラム in TOKYO

編集・発行

東京都国際交流委員会

〒101-0021 東京都千代田区外神田 1-1-5

昌平橋ビル 3 F

電話 03-5294-6542

F A X 03-5294-6540

印 刷

社会福祉法人 恩賜財団 東京都同胞援護会 事業局



